一　プロローグ

　私は、この物語の語り手であり、作者である。だが、物語が一旦始まれば、作品は作者の手を離れ、登場人物のものになるというから、登場人物に言われたままに、登場人物の会話や行動を鉛筆やボールペンで字を描いたり、キーボードを打ったりする、単なる機械仕掛けの第三者と言えるかも知れない。語り手である以上、事実関係のみを読み手である皆さんに報告する。決して意図的に、作品を捻じ曲げようとは思わない。
　ただし、登場人物に影響を与えない範囲で、登場人物の行動等に対して、語り手としての感想は言わせてもらう。それを、読み手である皆さんが、どう感じるかは別である。私が感じていることは、作者も感じていることであろう。そのことから、読み手の皆さんも、作者が何故、この作品を生み出そうとしたのかの一端を知ることができる。もちろん、それを知ったからと言って、どうということはない。
　見事、私の意図を見抜けました。おめでとうございます。なんて、作者である私からお誉めの言葉も、愛用の百五円のシャーペンをプレゼントする予定もない。ただ、読んでいる最中は、この作品を心から楽しんでもらい、読み終わった瞬間、自分が、今まで何をしていたのか忘れてしまって、いやに時計の針が進むのが早いなあ、こうして人生が過ぎ去っていくのだ、ということを知ってもらえればありがたい。
　前置きが長くなったが、それじゃあ、物、もの、モノ、者を語らせてもらいます。

　これは、ある公衆トイレの物語である。個人情報保護の観点から、使用者および懺悔した者の個人名は控えさせてもらう。この告白日記を読み、少しでも、トイレを単なる排泄物の使用場所だけでなく、忙しく、慌ただしく、時として感情が不安定になりがちな現代人の心の拠り所、また無感情、無感動になりがちな人に、生を、生きていることを実感できる場所になるように、有効に活用して欲しい。これが、公衆トイレが意を決し、個室を抜け出て、外部にまで告発しようと思い立った理由である。さあ、始まり、始まり。
　これは、公衆トイレが見た、略して、トイミタの物語である。なお、再度言うが、個人情報保護の観点から、公衆トイレを特定するような描写は控えているので、この物語を読んだからと言って、公衆トイレを探し出そうというような行動に至らないよう、切にお願いしたい。

　ここは、駅前の歩道橋の橋脚にある公衆トイレ。駅は、電車とバスのターミナルになっており、一日何万人もの会社員や学生などが乗降する。特に、朝と夜のラッシュアワー時には、人が溢れている。そこに、トイレがある。今時、珍しく、男女共用だ。便器は洋式だが、大便器しかない。このトイレはちょうど、横断歩道と横断歩道の真ん中に在り、上を見上げれば歩道橋がある。
　通常、トイレを使用したい人は、駅のトイレか会社や学校で用を済ますのであろう。ただし、電車やバスの乗っていた際に、トイレに行きたくなったものの、始業時間まで時間がなく、急いで電車を降りたものの、運悪く、信号にひっかかってしまい、我慢できなく人たちが、このトイ

レを利用することになる。普段は、トイレの存在を忘れられ、通り過ぎてしまうほど、小さなトイレである。だが、事件は、確実に現場で起こっている。さあ、小さなトイレの小さな物語に耳を傾けてみませんか。

二　午前九時十分から終わるまで　トイレのお掃除おばさん

「ぴ・ぴ・ぴ・ぴ・ぴ」

信号音が鳴っている。今は赤信号。人々は横断歩道で止まっている。通勤・通学の時間帯を過ぎたため、人影はまばらだ。いや、まばらどころか、たったの三人だ。始業時刻に遅れそうなのか、電車を降りた後ここまで走って来たため、汗を拭き出しながら待っている若いサラリーマンや、授業はとっくの昔に始まっているにも関わらず、そんなことは自分には関係ないかのように、だらだらと歩いている女子高校生たちだ。その集団の中に、清掃作業服姿のおばさんが、信号が変わるのを待つのがもどかしいように、歩道で足踏みしている。

信号が変わった。赤から青だ。ダッシュ。フライイングはしていない。先頭に立つおばさん。続いて、後を追う、若サラリーマン。最初から出遅れ、前に進むことさえ忘れている女子高校生。わずか十メートルの距離の横断歩道だが、ここでの競争結果が、これからの人生を決定するのではないかと思えるくらいのスピードで、おばさんが早足で歩く。

一旦は、遅刻は仕方がないとあきらめていたが、目の前を走るのかのように歩くおばさんに触発され、後塵を拝すまいと横並びになるサラリーマン。そんな二人の様子を眺めるでも無視するでもなく、存在自体が浮いているにも関わらず、歩幅をなくしたかのように足を引きずりながら歩く女子高校生。この三人の勝負はいかに。

横断歩道を渡り、ターミナルに到着すると、おばさんは右に直角に曲がる。追い抜いたと思った若サラリーマンは、目の前の目標物が視界から消えたため、ええっ、どうなっているんだととまどいながらも、勢いのついた加速度は革靴の底の摩擦をものともせず、慣性の法則がバンザイと手を上げながら、そのまま、ターミナルを過ぎ、会社のある方向へ体ごと向かって行った。

二人が必死の思いで挑戦した十メートル競走に、参加しているのか、参加していないのか、自分でも不明な女子高生は、まだ、横断歩道の真ん中辺りまでしか到達しておらず、信号が点滅しているにもかかわらず、長いつけまつげを上下させながら、風に煽られふらふらと歩いている。そうなんだ。女子高校生はもともと、この競争に参加する意思はなかったのだ。煽り立てた作者から、読者の皆さんに、お詫びを申しあげたい。

さて、この章の主人公である、お掃除おばさんについて紹介しよう。名は松川絹子。六十五歳。一人暮らしで、家族はいない。婚姻歴もない。父や母は既に亡くなり、天涯孤独の身だ。年金は二か月に一回、約十二万円、月にして、約六万円が支給されている。亡き父や亡き母の家があるので、年金だけでもなんとかやり繰りすれば、生活できないことはないが、それだけでは、やはり苦しい。

それに年金だけでは、自分の楽しみ、そう、松川は旅行が好きであった、ができない。旅行といっても、ほとんどが日帰りで、旅行会社が企画している日帰りバスツアーに参加している。もう、十年来、同じバス会社を利用しているので、ツアーのコンダクターや、常連さんとも顔なじみである。いつも一人で参加しているが、寂しいと思ったことはない。

以前、同じ清掃会社の同僚と行った時もあったが、道中、会社や他の同僚に対する悪口や不満ばかりをしゃべることになってしまい、折角、気分転換を図るために、生活費を削ってまで溜め

たお金を払って、自分が住んでいる遥か遠くの場所に来てまで、会社にいるのと同じ事を繰り返すのは馬鹿らしいと思い、それ以来、同僚と旅行をするのはやめた。
　一人で参加しても、常連さんがいるので寂しくないし、知らない人と相席になって、お互いのちょっとした身の上話をするのも、それはそれで楽しいし、旅行先の名所旧跡への感想が素直に語り合える。それに、一番のいいのは、旅行だけの付き合いで、それ以上、関わりがなく、煩わしさがない。人間、なんでも話し合える関係が重要だと言うけれど、うだ話などをするのもいやだし、聞く方だって、疲れる。
　さて、読者の皆さん、この章の主人公、松川松川について少しは知ってもらえただろうか。それでは、メインのストーリーに戻る。
　松川は足を早めた。でも、それは、並走しようとする相手からの追撃を逃れるためでなく、当初から、仕事場であるトイレに到着するのが目的であったため、横断歩道を渡った後、直角に曲がったのだ。しかしながら、何かが、追いかけて来ているという自覚はあった。
　右耳に飛び込んでくる自分以外の荒い息使い。これを避けるためには、足取りを速くするか、方向を変えるしかなかった。運よく、横断歩道を渡りきるまでは、目には見えないけれど、音のみで認識できる謎の物体に追いつかれなかったので、当初の目的通り、トイレの方向に転じたのだ。
　ただ、直角に曲がったのは、やはり意図的だった。直角に曲がれば、相手は、そのまま真っすぐに通り過ぎるのではないか。それでも、相手が直角に曲がり、自分の後をついてくれば、これに対しては敢然と戦うしかない。
　あの公衆トイレまで行けば、倉庫にモップとバケツがある。普段、使い慣れている道具だ。床を拭くモップで、相手の顔を拭いてやる。相手が、突然の攻撃に、息ができずに、ぶわっと悲鳴を上げる。その次に、バケツに水を汲むと、「朝から何を考えてやがるんだ。このおばさんに痴漢しようだなんて」と相手の頭に水を掛けて、目を覚まさせてやるつもりだった。
　そこまでの戦闘イメージはできあがっていたので、いざ、つきまとっていた相手が、全く、自分には関心がなく、そのまま通り過ぎていってしまったので、拍子抜けしただけでなく、自分の妄想が恥ずかしくさえ思えた。松川は気を取り直すために、わざと、元気よく、「お掃除、お掃除。お仕事、お仕事」と、誰に聞かすわけでもないのに、大声を上げた。
　掃除の制服は縦じまだ。どこかの野球チームと似ている。松川は、この制服が気にいっていた。会社のオーナーが、
「私たちの仕事は、美を取り戻すことです。汚れを取り、物が本来持っている本質の美を輝かせることなのです。決して、手抜きはいけません。手を抜けば、必ず、物にくすみが出ます。ごまかせば、ごまかすほど、醜悪をさらすことになります。
　そのためには、まず、私たちの心を磨かなければなりません。掃除道という筋が一本通っていること、そして、その筋が一本だけでなく、何本も通っていること、だから、私は、この縦じまのユニフォームを作ったのです。決して、手抜きをして、楽をしようだなんて、よこしまな気持ちは持たないでください。
　もし、万が一、もちろん、私は、皆さんがよこしまな気持ちを持つとは思っていませんが、そ

んな気持ちが起きようものならば、自分を戒めるためにも、この筋が通った縦じまを見つめてください。きっと、あなたの心に、この仕事に初めて就いた時の、仕事を頑張ろうという新鮮で、みずみずしい気持ちが思い出されるでしょう。さあ、皆さん。この縦じまのユニフォームとともに、一緒に頑張りましょう！」
　松川は、社長から受けたあの時の訓示を忘れない。いつも、この公衆トイレのドアの前に立つたびに思い出すのだ。
「さあ、がんばろう」
　自分に向けて、トイレに向けて、社長に向けて、言葉を出した。
　まずは、トイレの横にある倉庫の鍵を開ける。倉庫と言っても、幅五十センチ、高さ一メートル五十センチくらいの小さな荷物入れである。だが、その小さな空間に、松川の七つ道具が揃っているのだ。
　中を確かめる。ほうきがある。ちり取りもある。モップもある。バケツもある。ぞうきんもある。ゴム手袋もある。これで、六品。あとひとつは？そう、松川自身である。
　さあ、七つ道具は確認できた。早速、トイレ掃除だ。だが、これからが問題だ。いつも、掃除の前にドアを開ける瞬間は緊張する。ドアを押す。ドアがトイレの内側方向に動く。三十度。まだ、何も変わっていない。四十五度。何かが散らばっている。六十度。やはりそうだ。九十度。ドアが完全に開いた。
　そこはトイレじゃなかった。段ボールが敷き詰められ、新聞紙が飛び交い、トイレットペーパーが宙に舞う異空間だった。
「やはり、今日もか・・・」
　松川は段ボールに手を当てる。少し生温かい。敵は逃げ出してからそんなに時間は立っていない。後ろを振り返る。通行人やバスを待つ人はいるが、朝から酔っぱらった千鳥足の人間はいない。
　逃げられたか。いや、逃げられた方がいいのだ。へたに見つけると、後の対応に困る。ここは駅の近くなので、近くに派出所がある。泥酔状態で、トイレに座り込んでいたら、警察官を呼べばいいが、へたに意識があって、こちらに文句を言ってきたり、顔を覚えられたら後が面倒だ。ひょっとして、バスツアーで一緒に乗り合わせたら、楽しい旅が最悪の展開になる。
　トイレの中が汚されると掃除は大変だけど、人がいない方がほっとする。多分、犯人は、昨晩も飲み過ぎて、最終電車に乗り遅れ、金もないので、このトイレをカプセルホテル代わりにしたのだろう。洋式トイレなので、横たわることはできないが、座って壁にもたれることはできる。便座に段ボールを敷けば、底冷えを防げられる。新聞紙は、毛布代わりに使ったのだろう。
　本当に、新聞紙が毛布代わりになるのだろうか。また、こんな狭いトイレの中で眠れるのだろうか。
松川は、ふと試してみたい気分になった。便座に置かれた段ボールの上に座る。段ボールはタンクの方まで覆われている。ソファーとまではいかないけれど、無料宿泊スペースとしては文句が言えない。
　問題は足が伸ばせないことだ。バス旅行に慣れている松川だが、バスの中ではぐっすりと眠れ

たことはない。うとうとはするものの、疲れはとれない。それこそ、バスに揺られ、夢心地のまま、意識だけは覚醒している状態だ。だから、夜行バスは苦手だ。
　ただし、最近は、隣に気兼ねがないよう一列に三席しかなく、席が独立している、しかも、リクライニングシートがほぼ百八十度近くまでフラットになる夜行バスもあるそうだ。だが、夜行バスとトイレとを比較してはいけない。何しろ、トイレでの宿泊はただ、だ。無料だ。ロハだ。
　松川は座った。便座は狭い。寝ているうちにお尻がずれそうだ。足を壁に押し当てる。膝が少し曲がる。足の裏で壁を突張れば、便座から落ちる心配はない。
　後は寒さ対策だ。夏ならば、服のままでもいいけれど、今は秋だ。朝方は少し冷える。トイレの床はコンクリートなので、外の寒さが屋内にそのまま伝わってくる。だからこそ、便座の上に座るのだ。毛布代わりに、床に落ちている新聞紙を拾う。スポーツ新聞だ。駅前のコンビニで買ったのだろう。昨日の日付だ。酔っ払いは、寝る前に新聞を読む習慣があるのだろうか。いや、単なる暇つぶしだろう。
　胸から腹、膝に掛ける。全部で三枚だ。松川の全身が新聞で覆われた。意外にも温かい。もちろん、新聞紙が熱を出しているわけではない。自分の体温が新聞紙で反射されて内にこもるからであり、逆に、忍びよる寒い外気を遮断してくれるからでもある。心地いい温かさだ。
　問題は足である。松川は身長が百五十センチくらいなので、窮屈には感じないけれど、普通の男性の身長ならば、膝が三角定規のどこかの角度にならざるを得ない。足を伸ばして寝るのと、曲がったまま寝るのとは、足の疲れの回復度は違う。もちろん、何回も言うが、ここは公衆トイレだ。ビジネスホテルじゃない。ただで宿泊しているのだ。文句なんて言えるはずはない。
　松川は眼をつむったまま、うつらうつらしてきた。大丈夫。これなら眠れる。そこに、突然、ドアが開いた。
「あのー。トイレ使えますか？」
　女性が顔を覗かせた。いけない。掃除中の立て看板を出すのを忘れていた。松川は新聞紙を跳ね除け、立ち上がる。
「すいません。少し汚れているので、まだ清掃中です。お急ぎでしたら、駅のトイレをお使いください」
　慌てて、取り繕う松川。女性はトイレから立ち去った。それから、松川は、「本当にもう。こんなに散らかせて」と文句を言いながらも、頭の中では、夜行バスならぬ夜行トイレで一晩を明かす、自分を夢見ていたのであった。

三　午前十一時四十五分から午後０時まで　風船使いの女

「行ってきまあす」
　三好春代はわざと明るい声を上げた。営業所には、開店を待ちわびていたのか、既に、四つの椅子にお客さんが座っている。その前には、同僚たちが、お客さんの要望を丁寧に聞いて、航空機やＪＲなどの鉄道、ホテルの予約などに対応している。三好も窓口当番があるが、今日は午後からである。午前中は、お得意さんの会社を回り、出張の予約を受けたり、予約された切符を持っていく仕事がある。
　三好は、子どもに頃から、旅行が好きだった。大学生の頃は、毎日、バイトに明け暮れ、お金がたまると、春休みや夏休みに、日本各地だけでなく、世界中を旅行した。お金はないけれど、時間はある。大学生の特権だ。
　この趣味を仕事に生かしたいと思って、旅行会社に就職したものの、現実は異なっていた。毎日がデスクワークで、たまに、今日のように、店を出て、お得意さん周りをするだけであった。お客さんが、どこそこへ行きたいと、と言えば、私も行ったことがあるんですよ、と、会話がはずみ、営業にはプラスになったものの、自分自身は、人が旅行に行けるのに、自分が行けないことから、欲求不満になる。
　たまに、休みをもらって、旅行に出かけることもあるが、休みは、オフ・シーズンなので、観光客等は少ない。その分、ゆったりとした気分で旅行を楽しむことができるが、でも、何か物足りない。そう、ゴミじゃない。人ゴミがないからだ。
　オン・シーズンでは、人が多くて、観光も満足にできないと不満たらたらのくせに、いざ、オフ・シーズンで、ひとっこ一人いない観光地では、何か、物足りなく、寂しいのである。観光する目的は、観光地を楽しむことよりも、観光地に人気があること、つまり、その場所を選んだ自分に間違いがなかったことを確認したいのかもしれない。
　そう、人間とは、人と人との間なのであり、一人では人だが、人間ではないのである。うーん、我ながら、いい言葉だ。今度、旅行を迷っているお客さんに、話しかけてみよう。旅とは、人と人との間に行くこと、あなたが誰かに出会うこと。キャッチフレーズで使えそうかな。
　三好は、ほくそ笑む。
　そのくせ、一人の方が煩わしくなくていいと思うこともある。うーん、アンビバレンツ。この複雑な感情そのものが人を人足らしめているのだろう。あーあ。兎に角、旅行に行きたいなあ。
　三好は、旅に行きたいという欲求を満たすために、ある行動をとっている。心理学を学んだわけではないけれど、他に目的をすり変えることで、精神的に平衡を保っているのである。
　まず、お得意さん回りの際、同じ道を通らない。人間、得てして、自宅に帰る際など、めんどうくさいからか、安心できるからか、安全であるためか、同じ道を通りがちである。同じ道を歩けば、極端な話し、目をつぶっても歩けそうだ。
試しに、片眼で歩いたことがある。もちろん、無事に、家に戻ることができた。当り前か。次に、二秒から三秒の間、両眼をつぶる。もちろん、足は前に進ませる。これも、問題なく、家に着くことができた。さすがに、自宅まで、ずっと眼を瞑ることはできない。

三好の家は、住宅街だが、道路の片側には幅二メートルほどの水路はあるし、電信柱も点在している。反対側から、自動車や自転車がやってくる危険性もある。
何が言いたいかとういと、慣れた道でも、目が開いていても、本当に何かを見ているとはいいがたいということである。眼球の網膜に、通りすがりの家の庭に、花が咲いているのが映っても、脳は何の反応も示さない。ただ、反対側から、車がやってくれば、脳の命令により、身を守るため道路の端による。それ以外は、休眠状態である。
これは、脳が意図的に、慣れることで、余分の観察力を省くため、つまり、省エネをしているのである。それは、それでいいとして、やはり、それはいけない。一体、どっちだ。どっちでもいい。
とにかく、三好は、旅行したいという気持ちを爆発させることなく、満足させるために、日常の行動の中で、旅行もどき、疑似旅行をしている。例えば、営業周りでも、自宅に帰る時でも、あえて違う道やコースを選択し、脳に見知らぬ土地に来たのだと錯覚さえ、旅行気分を味合わせている。これは、やってみるとなかなか面白い。
自宅から駅までのわずか五分の距離でさえも、道を変えてみると、あった家がなくなって代わりに駐車場に変わっていたり、倒産した会社の空き地に、産婦人科医院が新設されていたり、お好み焼き屋が進学塾に変更していたり、などする。
身近な場所でさえこうした変化があるのだから、職場からお得意さんまでの行程では、もっと大きな変化がある。でも、不思議なことに、新たにラーメン屋がオープンしていたとしても、
以前、どんな店が営業していたのか覚えていない。
店だけでない。ビルの建て替えがあった際も、新築のビルの前は、同じようなビルだったのか、木造の住居だったのか、空き地だったのかも、定かでない。今、目の前にある者が現在であり、過去も未来もない。全く今の自分の生活と同じだ。
仕事をしながら、自分の欲求を満たしている三好だが、いくら道を変え、街の新鮮な発見に驚いたりしても、それだけではもの足りない。やはり、頭の中では日本中、世界中を飛んでいる。だが、何かの物質的な支援、援助がないと、夢も膨らまない。
そこで三好が考えたのが、風船である。風船で何をするかって？まさか、風船を膨らまして、体中の至る所につけて、空を飛ぼうだなんて、夢想的なことを考えているんじゃないだろうかって？
そのまさかである。だが、風船をいくら膨らまして、体に結えても、自分の体が空中に浮かばないことくらい、いくら夢想家の三好だって知っている。ただ、夢の世界に入り込むためには、ちょっとした小物、小道具が必要なだけだ。
「ありがとうございました」
三好は訪問した事務所を出た。時計を見る。十時三十分を回っている。次のお得意さんとの予約は十一時だ。少し時間がある。ちょっと寄ってみよう。
三好が足を向けた先は、バスターミナルだった。三好は旅行好きなこともあって、飛行場や港、電車の駅、バスターミナルなど、乗り物の駅が大好きであった。何するわけでもないけれど、乗り物たちが、発着するのをただ眺めているだけで満足できた。その乗り降りする乗客に自分の

姿を重ね合わせるのであった。
　今、夜行バスが東京から着いた。タラップからサラリーマンが降りた。あのサラリーマンは、大事な商取引で東京へ出張したのだろうか、それとも、反対に、東京からこの街にやってきたのだろうか。あのおばさんは、お土産の袋を持っている。結婚式か何かで、東京か関東方面でも行っていたのか。紙袋は、浅草のせんべいの老舗の物だ。疲れた顔をしている。時計を再度見る。十時三十五分。到着の予定時間より大幅に遅れている。きっと、途中で、事故か何かあったのかもしれない。
　乗客のことをあれこれと考えるだけでも楽しい、だが、それだけでは十分ではない。三好はターミナルの片隅にあるトイレへと向かった。
　もう終わったかな。いつも朝一番、トイレは掃除中である。だけど、十時を過ぎれば使用できる。掃除中の看板がない。もう大丈夫かな。扉を開く。
「あのー。トイレ使えますか」
　三好が中を覗く。そこには、掃除のおばさんが便器に座っていた。おばさんは、新聞紙を跳ね除け、立ち上がった。
「いえ。少し汚れているので、まだ清掃中です。お急ぎでしたら、駅のトイレをお使いください」
　おばさんの声に、三好はがっかりした。三好は、トイレをしたいわけではない。このバスターミナルの近くで、自分が夢想できる空間が欲しいだけである。だから、他のトイレを使うわけにはいかない。少し早いけれど、他のお得意さんを回ろう。三好は決心して、トイレを立ち去った。
「ありがとうございました。また、お伺いします」
　三好は、頭を下げ、営業所のドアを閉めた。時計を見る。十一時四十五分。これで午前中の仕事は全て片付けた。昼からは、事務所に戻って内勤だ。昼休みが終わる午後一時まではフリーだ。今さら事務所に帰っても中途半端だ。「よし、行こう」
　三好は意を決した。再び、バスターミナルに向かう。歩いて五分の距離だ。信号は青で、スムーズに横断歩道を渡れた。昼食の時間帯なので、バスターミナル付近で待つ人は少ない。それでも次から次へとバスがやってきては、停車しドアを開け、しばらく待ち、誰も乗らなくても、時間通りに、ターミナルを離れる。
　三好はターミナルの風景を横目で見ながら、トイレの前に辿り着いた。ドアは空を表示している。それでも、ドアをノックする。返事はない。ドアを押す。ドアが開いた。中には誰もいない。さっきは、掃除のおばさんがいた。しかも、ドアのわずかの隙間からは、段ボールなどでちらかっているのが見えた。だが、今は、そんな乱れた様子は微塵もない。きれいだ。タイルの表面に水滴が残っている。
　ちゃんと、水洗いをしてくれたんだ。便器もぴかぴかに光っている。いい気持ちだ。臭いもない。高い場所の網入りの擦りガラスが斜めに空いている。棒か何かでないと届かない高さだ。そのため、外から覗かれる心配はない。覗かれても、斜めのため、中は見えない。そこから、新鮮な空気が降りてきて、この個室を満たす。

多分、私が初めてのお客さんなんだ。お客さん？三好は思わず笑った。トイレを使うのもお客さんかな。でも、お客さんなのかもしれない。よく、トイレをきれいに使ってくれてありがとうございます、という壁紙が貼られていることがある。ありがとう、と言われるくらいだから、お客さんなのかも知れない。だからと言って、胸を張ることもない。トイレからすればあたしがお客さんなのかもしれないが、あたしから見れば、トイレはあたしにとってお客さんだ。何かあった時、あたしを助けてくれるお客さんだ。

三好は洋式トイレの蓋をしめる。三好は、便をしたいわけではない。ちょっとした空間、ひとりになれる空間、誰にも見られることもない空間、できれば無料で過ごせる空間が欲しかったのである。そこがこの公衆トイレであった。

三好は、事務カバンから風船を取り出した。赤色である。できるだけ新鮮な空気を吹き込みたいので、三好は立ち上がる。そして、窓の下に立つ。息を思いきり吸いこむ。窓からは、まだ穢されていない天使の空気がひんやりとした羽根を休めて降りてくる。三好は、その天使を吸いこむと、風船の中に注ぎこんだ。

ぶううううう。一回では膨らまない。ぶううううう。二回目を吹き込んだ、

なんだか、口じゃなく、下の穴から出ているよう思われる。三好は、思わずお尻に手を当てた。大丈夫。体の中から漏れているわけではない。今度は、できるだけ、息漏れがしないよう、唇でゴムをはさむ。ぶううううう。

やっと、おたまじゃくしができた。更に息を吹き込む。ぶううううう。今度は、かかしの頭に変わった。さあ、もう一息だ。ぶううううう。ようやく、風船になった。誰が見ても風船だ。

折角、成長した夢がしぼまないように、空気の入り口を輪ゴムで何度も、何度も結ぶ。赤い風船は、三好の等頭大だ。風船の真ん中を押すと、三好の顔が浮かび上がってくるように思える。

三好は風船を右手の掌の上に乗せた。軽くポンと突く。風船が浮いた。三好の胸から、肩、顔、頭上、へと上昇していく。風船を捕まえようと、三好の右手が伸び、肘がまっすぐになる。

このまま、風船を掴んでいれば、空高く舞い上がってしまいそうな気分になる。三好は、目をつぶった。今はどこ？バスターミナルの上空。風船のエレベーターが上昇する。電車の駅に併設のデパートが見える。デパートをエスカレーターで登っていくお客さんと眼が合う。相手は眼をまん丸にして、驚いている。そりゃ、そうだ。三好自身も、風船で空を飛んでいるなんて、不思議だ。

上昇気流は、温かい。だけど、体全身に風を受け、気分は壮快だ。三好が乗った見えないエレベーターは、デパートの屋上よりも高くなった。夏の間、開催されていたビアガーデンのテントの屋根が見える。誰も乗っていないゾウやキリンなどの動物姿のゴーカートが見送ってくれた。風船は、三好は、まだまだ上昇する。

風船は雲の上を通過する。いつも地面から見上げると、雲が空にポッコリと浮かんでいるので、いつかは乗ってみたいと思っていたが、いざ、雲の中に入ると周りは真っ白で、視界はきかない。

雲を通過すると、今度は、旅客機が飛んできた。三好がチケットを渡したお客さんも乗っているかもしれない。三好は手を振る。旅客機の窓ガラスには幼稚園児くらいの子どもの顔が見えた

。子どもがお返しに手を振ってくれた。子どもの顔が見えなくなった。隣に座っている親に話し掛けているのだろう。

今度は、母親が顔を出し、三好を見た。見る見るうちに顔面がそう白になった。母親は、何も見なかったかのように、窓の内側の戸を閉めた。その後、わずかに空いた戸の隙間から、子どもの顔が見えた。小さな指で手を振っている、三好も手を振り返した。子どもは事実を事実として受け止めるが、大人は自分の常識以外は事実として認めない生き物なのだ。風船と三好は更に更に上昇する。

現実の三好は、立ち上がり、便器の上に立った。風船を持った右手は天井に届きそうだ。右足のかかとは浮いている。つま先立ちだ。頭の中だけでない。現実の三好の体も宙に浮こうとしているのだ。頭の中の夢を補完する体。この両者が一体となって、三好の旅は成立する。

三好はもう少しで大気圏を突破する。しまった。宇宙服と酸素ボンベを持ってくるのを忘れた。まあ、いいか。宇宙には、各国の人工衛星が何十機も、地球を周回しており、その中には、宇宙服や酸素ボンベを販売しているコンビニや百円ショップもあるんじゃないか。そんな馬鹿な、ありえないだって。いいじゃない。これは夢なんだから。でも、将来、遥か未来に、人が宇宙で住むようになれば、コンビニや百円ショップも営業するだろう。その夢を三好は先取りしているのだ。

パチン。その夢が破れた。いや、風船が破れたのだ。三好は、便座の上に立ち上がり、なおかつ背伸びをしていたため、風船が天井の照明器具に触れて、破裂してしまったのだ。

三好の瞑っていた両目が開いた。その時、トイレのドアが激しくノックされる。ドンドンドンドンドン。ノックじゃない。殴っている。ドアを叩き壊そうとしているように聞こえる。よっぽど慌てているのか。「入っています」と答えればいいのだけれど、なんだか声を出すのは恥ずかしい。急いで、便座から飛び降りると、ノック返しをする。コンコンコン。右手の指の第一関節四本で応える。

すぐさま、ゴンゴンゴンゴンゴンと返される。ドアの外の人間は、よっぽど待てないのだ。三好は、まだ夢の待合室で彷徨っていたが、外部からの強烈なアナウンスに、追い出されるようにして、退場口から出ていった。慌てていたので、足元には、旅の案内人の風船を残したままで。

四　午後０時から午後０時三十分まで　座薬使いの男

「ふう」

順之助は安心した。だが勝負はこれからだ。今朝は悲惨だった。明け方に、尿道結石で痛みだし、救急車で病院に運ばれた。ＭＲＩで検査した結果、もう少しで石が出そうだ、ということで、痛み止めの座薬を渡された。その薬は自社製品だった。

この薬は効くのか、効かないのか、自社製品でよかったのか、他社製品の方がよかったのか、悩ましい問題だった。そう、順之助は製薬会社のプロパーだった。体調不全なので、会社を休んでもいいのだが、今月は、思ったほど売り上げが伸びていない。こういう時は、なじみの病院に行って、医師や看護師を持ち上げ、少しでも薬品の購入を頼むしかなかった。そのために、これまでも、医師にはゴルフの接待を、看護師には誕生祝いをプレゼントするなど、様々な営業努力をしてきたのだ。

だが、あまりにも恩つけがましくすると、逆効果になる。相手がその気にならないと、こればかりはどうしようもない。相手の情をほだしつつ、なおかつ、合理的な説明も必要なのである。そのため、製薬会社は、プロパーを雇っているのである。

政治家が選挙の際、どぶ板を踏み、支持者の家を訪問して握手を求めるように、プロパーだって、新しい診療所から古い診療所まで、担当地区をすみずみまで周る。

表道だけでない。裏道も通る。表玄関だけでない。勝手口からもお伺いを立てる。これを一日、一か月、一年、十年、十五年とやってきた。当初に比べれば、やり方も勝手も変えてきた。ゆるぎもたるぎも出来るようになった。勝負どころで力を入れるところも、片ひじをはらずに力を抜くところもわかってきた。だが、体の方は、酷使されていた。仕事の経験を積めば積むほど、順之助の体の疲労も、名前通りに順々に積み重なって来た。これは、洒落にならない。

最近、膝が痛い。だが、膝は骨である。本来、骨が痛いなんてありえない。膝の周囲の筋肉が痛いのである。マッサージを兼ねて押すと痛みがある。指を離すと気持ちがいい。膝だけでない。ふとももも、ふとももの裏も、すねも、ふくらはぎも痛い。アキレス腱も痛みが突如としておこる。営業は、足で稼いでなんぼ、の世界である。その足が、この有様だ。そろそろ内勤も考えないといけない。会社の上司や同僚にも相談した。

上司は、人事当局に話をしておくと言ってくれた。ありがたいことだ。だが、実際に内勤になれるかどうかはわからない。それに、プロパーが内勤になれば、給料などの待遇も変わってくる。結婚して、十年。子どもは、まだ小学生。これから、教育費もかかってくる。もうひと踏ん張りだ。ここは、痛みをこらえてでも、歩き続けなければならない。そんな矢先に、足の痛みが膀胱に移ったのだ。まさに、暴行ものだ。それこそ、洒落にならない。

今朝の痛みが思い出された。切り傷や擦り傷などの外傷は、血が出て、その傷口の大きさ等から、ある程度痛みが予想されるので、痛みを我慢しやすいけれど、腹痛など、体の中の痛みは、目に見えないだけに、また、外傷のように治癒の状況がわからないだけに、不安が募り、痛みが我慢しづらいのだ。

尿道結石も然りだ。ガマの油売り（最近、ガマの油なんて売っている奴なんか見たことがない

）に呼んできて、採取させたいぐらいに、額から脂汗が噴き出てきた。体中から汗までが、体の痛みを訴えていたのだ。なんとか、病院に運ばれて、痛みは収まった。

そのまま職場に行き、営業周りで外に出た。最初の診療所から、何だかおかしいぞ、と感じられた。地震の時に動物や鳥が事前に逃げ出すように、体が不調の時、なんらかのお知らせが出ている。それに早く気付き、病院に行ったり、薬を飲んだり、大人しくベッドに横たわっていれば、嵐が過ぎ去ってくれるのだが、それに気づかないと、後から、七転八倒の苦しみを味わうことになる。

だが、今は、仕事中。今月の締めまでに、営業結果がでていない。午前中に一診療所、午後からは二診療所回らなければならない。この三つの診療所の医師とは、彼らが総合病院や大学病院から独立する前からつきあいがあり、独立する際は、不動産会社を紹介したり、税理士を紹介したり、はてまた、あのお医者さんは病気を治すのが上手だ、とか、やさしいだとか、風評を流し、患者さんを紹介するなど、こちらとしては、何かと便宜を図って来たつもりだ。

その結果、開所してからは、毎日、一時間から二時間待ちで、患者さんが行列をなしている。困っている時は、お互い様だ。何とか、頼み込めば、営業に協力してもらえるだろう。

順之助は確信していた。だが、それも、実際に出向いて話をしないと結果はではない。電話だけで手軽にお願いすると、誠意がないと思われ、協力してもらえないのだ。兎に角、膝を突き合わして、顔を見合わせて、頭を下げて、お願いするだけだ。そのためにも、何とか、医者の元に、診療所に辿りつかないといけない。

午前中の部が終わった。営業の方は、上手くいった。これも日頃からの努力の積み重ねの結果だ。だが、徐々に、痛みが体に蔓延している。これも、日頃の不節制の知らない間の堆積の結果だ。痛みと言うダムが、もうすぐ決壊しそうだ。

昼飯は、うどんをすする。あまり、体に負担をかけないよう、噛まずに飲み込めるものにした。だからと言って、スポーツドリンクやサプリメントでは、食べた気がしない。そこで、選んだのが、うどんなのだ。なんとかうどんを喉越しに すすりこませた。下腹部の痛みは急激ではない。なんとか、持つか。昼から、あと二診療所。なんとか持ってくれ。

店を出た。営業車は、地下駐車場にある。横断歩道を渡り、あのバスターミナルから地下に通じるエレベーターがある。それに乗れば近道だ。信号が変わった。痛みが再発しないようにゆっくりと、かつ、急いで渡る。エレベーターのボタンを押す。Ｂ１だ。

その時だ。こらえきれない痛みが出た。早朝の痛みと同じだ。座薬の効き目がきれたのだ。座薬を入れないと、座薬を入れないと。

順之助はうわ言のように繰り返す。この公衆の面前で、ズボンを下ろし、下着を脱ぎ、お尻をさらして、座薬を入れるわけにはいかない。それこそ、変な風評が出て、会社をやめるだけでなく、自分の人生自体が、座薬を入れる時のズボという音とともに、崩れていく。

積み木でも、砂場の城でも、積み上げたり、築き上げたりするのには、長い時間がかかるが、壊してしまうのは一瞬でできる。日中なら、おてんとさまが、夜なら、お月さまが、自分を見ている。恥ずかしい行為はできない。とにかく、便所を探さないと。便所を探さないと。

順之助のうわ言の種類が変わった。一旦、駅の構内やデパートに戻らないといけないのか。

いや、それには間に合わない。そうなると、やはり、白日の下、他人に悪夢を見せる行為に走らないといけないのか。いや、それはできない。やはり、トイレを。やはり、トイレを。順之助は、三種類目のうわ言を吐き出しながら、お腹を押さえ、辺りを見回した。
　あった。ターミナルの隅っこにトイレが。トイレの看板が。今の今まで、こんなところにトイレがあるなんて気付かなかった。眼からうろこだ。眼薬を入れろ。足元に青い鳥だ。パン屑を撒け。いやいや、冗談を言っている場合じゃない。ありがたい話だ。順之助は、はあはあ、いや、ひいひい、いや、ふうふう、いや、へえへえ、いや、ほうほうの体でトイレに駆け込んだ。（ハ行は人が困っている時の表現として、適切に使えるいい言葉だ、と、国語の教師が作文の授業で教えてくれたのを、作者は思い出した。何でも、勉強しているものだ）だが、運悪く、ひとつしかないトイレには先客がいた。しかし、順之助の必死のノックが天に通じたのか（本人はそう思っているが、実際には、暴力的なノックが中にいる人間に恐怖心を与えたのだ）ドアが開き、中から、女性が俯いて出てきた。順之助も顔を伏せ、腹を押さえながら痛みを我慢していたので、互いに顔を見合わせることはなかった。
　順之助は、トイレに入るなり、ズボンとパンツを同時に下ろし、座薬を肛門に入れようとする。しかし、痛みがあるので、上手く入らない。入っても、半分ぐらいだと、座薬の軟膏のせいで滑り、すぐに肛門から出てくる。その間にも、軽い痛みは激痛となる。大便はでないものの、くそっ、くそっ、と叫びながら、なんとか、座薬全体を肛門に入れることが出来た。油汗がやっと収まった。ふーん。落ちつた。（ハ行は、気持ちが落ち着いたときにも表現できる適切な言語だ。これは作者が作った格言だ）
　これで、世界がいつ終わっても、パンツを脱いだまま状態のみじめな姿をさらさないでも済むぞ。順之助は、腰をくねくねと二回振り、パンツとズボンを同時に上げ、トイレの外に出た。
　ドアの外には女が立っていた。なんだか、変な目つきで、かつ、次にトイレに入るのがいやそうに、こちらを見ている。順之助はピンときた。女は誤解している。順之助が、座薬を入れる際、悪戦苦闘し、息が荒かったため、変な誤解をしているのだ。自分は正当な行為を行っただけであり、決してみだらな行為に及んだわけではない。それにも関わらず、女は顔をそむけた。このままでは、一生誤解されてしまう。
　たった一度、会った女だ。二度と会うことはないだろう。自分のことをどう思われようがかまやしないという気持ちと、いやいや、何事も小さなことからが肝心だ。堅牢なるダムも針の穴から崩壊することがある、と言う思いが交錯する。重要な契約の場面で、女と出会うかもしれない。誤解は早めに解く必要がある。順之助は意を決した。
「尿道結石は痛いなあ。痛み止めの座薬を入れるのは、本当に大変だ」と、わざと女に聞えるように、ただし、他の通行人には聞えないように、声を出す。女は、男の声を聞いたのか、聞かなかったのか、男の正当な理由を認めたのか、それでもまだ疑っているのか、いずれも外観的にはわからない素振りで、男の入っていたトイレの中に滑り込んだ。
　トイレの前で佇む順之助。再度、トイレの中の女に聞えるように、「尿道結石は痛い。座薬を入れないと痛みが抑えられないよ」と悲痛な声を出すのであった。その悲痛さは、トイレの中の女には伝わらず、代わりに、ターミナルでバスを待っている人たち全員が順之助の方に振り向

いた。順之助は顔を赤くして俯いて、その場をそそくさと立ち去ろうとした。

　そこで、再び、痛みが発症。いかに座薬といえども、すぐには効果が表れない。先ほどは、座薬を押しこんだ安心から、一時的に、痛みを忘れていただけであったのだ。よよよよよと、泣き崩れるかのように、その場にうずくまる順之助。人生とは、いかに、皮肉なものか、内実とはいかに異なるものなのか、思い知った順之助であった。

五　午後０時三十分から午後０時四十五分まで　ダンサーの女

「オーレ。チャチャチャ」
「オーレ。チャチャチャ」
　あかりは便器に座っている。今は、昼の休憩時間。事務所での食事が終わり、気分転換を兼ねて、散歩に出ている。その際に、いつも立寄るのがこのトイレだ。事務所からも近く、駅やバスターミナルがすぐ側にあるが、意外に、立寄る人も少なく、穴場だ。
　急にトイレに行きたくなって、ドアを叩く人がいても、すぐ側に駅のトイレもあり、駅に併設しているとデパートのトイレもあるので、一つしかないトイレだが、長時間、ドアに使用中の表示があっても、関心を持つ人は少ない。
　あかりは、ほとんど空いていることと、トイレが一つしかないことから、この公衆トイレを愛用しているのだ。確かに、男女共有のトイレなので、自分の前に誰が使用していたとか、自分の後に誰が使用するかは、気になることもあるが、そんなことよりも、このトイレが一つしかないことの方が重要だった。
「オーレ。チャチャチャ」
「オーレ。チャチャチャ」
　あかりは、今、ダンスの練習をしている。仕事は、パソコンに伝票を入力したり、支払いをしたりなど、いわゆる事務だ。面白いことはない。ほとんど一日中、座っていることもある。唯一の気晴らしが、このトイレでダンスの練習をすること。
　今、習っているのは、フラメンコだ。週末の土曜日が練習日だ。週一回の練習だが、踊っていると踊ることだけに集中でき、他の事が忘れられる。そう、忘れたいのだ。
　忘れたいのは、あの男のことだ。あの男との生活のことだ。離婚して、はや二年になる。月日の立つのは早いものだ。今となっては、あの頃、何故、お互いあんなにいがみ合っていたのか不思議な気持ちだ。離れ離れになると、あの男のやさしい所など、よい点も思い出される。一緒に旅行して楽しかったことも思い出される。
　離婚の原因は、男の浮気だった。夫とは呼びたくない。名前も口にするのがはばかれる。あえて言えば、男だ。男と呼ぶことで、相手が一般化され、普遍化され、自分の傷がやわらぐのだ。男は、浮気が本気となって、別の女性を選んだ。いや、私が男に別の女を選ばさせたのだ。そう思わないと、やっていけない。
　結婚して五年目。二人の間に、子どもはいなかった。男の帰りが遅くなった。これまでも、遅くなることはあったが、自分も仕事をしており、帰ることが遅くなることは度々あったので、お互い様だと思い、気になることはなかった。
　そのうちに、男が家に帰って来ない日があり、その回数が増えた。男に問い詰めると、仕事で遅くなったので、近くのホテルに泊まっただとか、飲み会で酔いつぶれたので、同僚の家に泊まらせてもらったのだと、いい訳をした。最初は信用していたあかりだが、そのうちに、休みの日でもぶらりといなくなることがあった。
　男は仕事の後片付けだとか、会社のつきあいでゴルフだとか理由をつけた。夫婦で生活してい

ながら、一緒の時間を共有することが少なくなった。これは、家族じゃない。夫婦じゃない。
　友人にも相談した。
「それじゃあ、調査を頼んでみたら。でも、結果がどうなっても、受け入れないといけないわよ」
　それが、友人の忠告だった。あかりは迷わなかった。中途半端がいやな性格もあっただろう。母親にも相談した。母親も離婚を経験していた。女手一つであかりを育てた。
「あなたの好きなようにしたら。私も好きなようにして、あの人と別れたの」
　それが母の言葉だった。あかりが、前の夫のことを男と呼ぶように、母も私の父をあの人と呼ぶ。特定されているようで、不明瞭な表現。輪郭がぼんやりとしている。あかりも、父の姿が曖昧にしか思いだされない。
　あかりは全てをはっきりしたいために男の身辺調査をした。探偵事務所から一枚の写真を渡された。男と相手の女性が二人で写っている写真だった。その側に子どもが立っている。まさか男の子どもなのか。それとも、前の男との間に生まれた子どもなのか。男に似ているようで似ていない。いや、絶対に似ているものか。男が、あかりの次にどんな女を選ぼうと関係ない。いや、そういうことを考えることさえいやであった。
　別れてしまうと不思議なものだ。男と五年間生活したはずなのに、あかりの体にそんな形跡は全く見当たらない。まるで、二時間の映画を見たかのように、ぼんやりと記憶にはあるものの、経験が全く残っていない。
　離婚した夫婦は、みんな、そんなものだろうか。あかりにとっては、それはありがたかった。人間の体は六十兆個の細胞があり、一日三千億個の細胞が生まれ変わっているという。単純計算すれば、約二十日日で、全てが入れ替わっていることになる。つまり、二十日前のあかりと今のあかりは、全くの別人だということになる。だからなのか。男と別れて早二年。それ以来、あかりは三十六回も生まれ変わっていることになる。男と生活した際の細胞は、もはや一個も残っていないのだ。
　今のあかりには、ダンスがある。二十日に一度生まれ変わる体に、忘れないうちにダンスを覚えさせなければならない。だからこそ、あかりはダンスを上手く踊れないのかもしれない。ダンスを覚えた細胞が次々と死んでいっているのか。
　ダンスを全く知らない素人の細胞が新たに生まれ、その隣のようやくダンスを覚えた細胞が消えていく。これじゃあ、いくら練習してもダンスは上手くならないはずだ。
　それじゃあ、ダンスの先生はどうしてあんなに上手く踊れるのだろう。ダンスの細胞だけが生まれ変わらずにそのまま生き残っているのだろうか。
　ある日、先生に尋ねたことがある。
「先生は、ダンスを忘れることはないのですか？」
先生は、にこっと笑って答えた。
「あるわ。毎日よ。だから、毎日練習しているの。朝起きて、顔を洗って、朝ご飯を食べて、練習して、夕方には皆さんにダンスを教えているの。生きることは、日々、練習じゃないだから、あなたも毎日練習して」

　あかりは黙って頷いた。生きることは、日々、練習なのだ。誰も経験したことのない、今日であり、明日なのだ。その日に向かって、練習しながら生きる。練習の結果が、自分の思いどおりの時もあれば、期待はずれの時もある。どちらにせよ、それは、結果であり、それも練習だ。よりよい方向に向かって行くしかない。
　それじゃあ、毎日が練習ならば、本番はいつ？多分、本番は来ないんじゃないかと思う。本番が来た途端、存在自体が終わっている気がする。そんなもんだろう。
「毎日、生きることが練習」
　あかりは、その言葉を、もう一度、繰り返した。自分だけじゃない。全ての人にとっても、生きることは練習なんだ。少しは、気が晴れた。気持ちが落ち着いた。失敗することは当り前だ。だって、これは練習なんだ。でも、できるだけ、失敗はしたくない。ダンスにおいても、結婚においても、人生においても。
　そのために、あかりは、今、先週のレッスンで教えてもらったダンスの振り付けを、再び練習している。今さらながら、人間は、というよりも、頭は、思い上がりもはなはだしい。目で見たことや、耳で聞いたことが、すぐに、自分にもできると勘違いしている。
　自分の体であって、自分の体じゃない。特に、ダンスを習い出してからは、特に、そう実感する。先生が指導してくれたように、また、ビデオで見たようには、自分の体が動かないのだ。
　指先ひとつだってそうだ。伸ばさなければならないのに、伸びない。少し曲げた方が柔らかく見えるのに、妙に力が入ってしまい、ぎくしゃくした形になってしまう。
　手だけじゃない。足だってそうだ。耳だって、音楽が入って来ているはずなのに、リズムに体が動かない。どうしてもワンポイント遅れてしまう。遅れを取り戻そうとすると、逆に、早く動いてしまう。もう、やんなっちゃう。
　あかりは笑った。本当に、笑った。こんなにも笑うことはなかったくらい、笑った。何故だろう？あの男と別れてからは、笑うことがなかったように思える。それが、ダンスが上手く踊れないだけで、笑える。自嘲だけれど、自分を客観的に笑える。笑える自分がいることが、嬉しかった。
　時計を見た。午後０時四十五分だ。そろそろ、職場に戻らなければならない時間だ。
　あかりは、立ち上がった。その瞬間でも、ダンスの動きを意識した。そう、トイレだけでなく、全ての立ち振る舞いに、ダンスの動きを応用すればいいんだ。そう、毎日が練習なんだ。
　あかりは、ドアを開け、トイレに向かってお時儀をした。野球選手がグラウンドに向かってするように、陸上選手がトラック向かってするように、柔道や剣道の選手が武道場に向かってするように、ドッジボールをやっている妹の子どもが体育館に向かってするように、お時儀をした。なんだか、嬉しくなった。

六　午後三時三分から午後三時十一分まで　タバコ吸いの男

「ポケ」
　鼻から煙が出た。
「フウ」
　風じゃない。口からも煙が出た。目の前の壁には「禁煙」の二文字の張り紙がある。
　男の瞳にも、当然、壁紙は映っている。だが、男はタバコを吸い続けている。そう。人は、目に見える物、見える事全てを理解しているわけではない。いや、理解はしていても、実行に移さないだけだ。
目の前の張り紙は、一方的な押し付けだ。それが社会のルールだとしても、何の説明もないまま、「禁煙」と書かれてあるから、その通り実行しなければならない理由はない。
　男がそこまで思っているのか、それとも、ただ単に、網膜に映った映像が、視神経の何らかの異常等により、脳まで到達していないのかもしれない。そうであれば、この男を責めるのは気の毒だ。まずは、眼科に行って、精密検査をしてもらうべきだ。もう少し、様子を見てみよう。トイレはそう思った。
「うっ」
　男が力み始めた。大便の開始である。力みながら男は思った。これまで、タバコを吸い、体中の自分の穴から、煙を吐き出すことに喜びを感じていた。大げさだが、生きがいさえ感じていた。タバコを咥え、息を吸いこみ、そして、しばらくの滞留時間。体全身に煙が充満する。空っぽだった体が、満たされる快感。そして、その煙を一気に吐き出す。口から、耳から、鼻から、目から（出るわけがない。代わりに涙がでる。）、体全身の毛穴から、肛門からも出そうとする。
　力を込める。ほとんどは、口や鼻から出てしまう。口や鼻を閉じれば、耳から出ることもある。それならば、耳を両手で押さえれば、肛門や体全身の毛穴からも煙がでるのか。
それができれば、忍者のように煙幕を張り、敵の目を欺くことができる。思いついたらすぐにやれ、だ。だが、男にとって敵とはだれだ。
　男は以前、体中から煙を出そうと試したことがある。タバコをくゆらす、大きく息を吸いこんだ後、椅子に座り、肛門を締め、口を閉じ、鼻は洗濯バサミではさみ、耳は両手で押さえ、目はつぶった。そして、体全身に力を入れる。顔が充血しているのがわかる。更に、力を込める。
　全身の筋肉がひとつにつながったような気がする。もうすぐだ。だが、その時、頭の中が白くなってきた。意識が白濁していく。男はそのまま気を失った。気が付いた時には、口が開き、鼻の洗濯バサミはソファーに飛び、両手はだらんと垂れ下がっていたので、全身の毛穴からタバコの煙が出たかどうかはわからない。ただし、頭が真っ白になったので、少なくとも脳には煙が届いたのではないかと、確信している。
　そんな些細な思い付きを実行することで。男は生を実感できた。次こそは、絶対に成功させてやる。その前向きな気持ちが、男を明日に生かしているのであった。
　そうだ。タバコの本当の楽しみ方は、吸う時の喜びよりも、出す時の方が快感なのである。男は再度確信した。

それは、全てのことに言える。例えば、食事だ。ラーメンや寿司、パスタにとんかつ、ステーキにサラダなどを食べると、舌で感じる喜びや胃が膨れる満足感がある。
だが、もっと本質的な喜びは、食べた物を骨の髄までしゃぶり取り、吸収できない残骸を、体外から排出する瞬間だ。特に、日に一回、朝食が終わった後、定期的に、ところてんのように押し出される通じは、健康にはいいかもしれないが、本当の意味での快感に到達しない。まあ、八十パーセントぐらいだろう。
老廃物が大腸の一歩手前で動かなくなり、次から次へと流れてく残骸がダムのように溜まるため、自分の意思に反してまるまると太っていき、外観から見れば、お腹がぽっこり状態で、お腹が空いたなどと言おうものならば、「何を言っているんだ。世界には飢えで苦しんでいる子どもたちがいるのに」と、白い眼で睨まれ、あげくの果てに唾を吐かれる始末となる。
それでも、排出を我慢していると、お腹がどんどんと膨らみ、ヒキガエルのように張り避けそうになり、あまりの苦しみに救急車を呼ぶと、男なのに、間違って、産科に運び込まれ、医者から「陣痛ですね。すぐに、帝王切開の処置をします。手術に当たっては、家族の同意が必要です」と、お腹が今にも爆発しそうにも関わらず、事務的な用紙を突き出される。
一体、世の中は、こうも契約行為が必要なのか。あの世にいくのにも、契約しなければならないのか。確かに、死んだ後、死体を燃やすのにも、医者が診断した死亡届を役所に提出し、埋葬許可書がないと、葬祭場で火葬することもできない。このまま、肉体が朽ち果てて、やがて骨だけになり、骨が炭酸カルシウムの粉末になり、風が吹いて、桶屋がもうかるまで、待たなければならないなんて、なんて不条理だ。ああ、やるせない。
男の妄想は続く。
　だが、今は、死体の処分が問題ではない。煙の処分が問題だ。いや、煙を出すのが問題ではない。食べ物のうち
栄養素を抜き取った残がいや老廃物を排出することが問題だ。
大便は、体全身の毛穴から排出する必要はないし、また、出てもらっては困る。排出口は、ただ一か所。肛門だけでいい。へたに力むと、毛穴から老廃物が出そうで困る。だいだい人生とはそういうものだ。必要な時（毛穴から煙を出すことが必要かどうかは、議論する必要があるが）には出ず、必要でない時に、誤って出てしまうものだ。
そうなれば、人生最悪の結果が待っている。今すぐ、服を脱ぎ、体全身をトイレットペーパーで撒き、ミイラ男にならなければならない。その白い紙が茶色に滲む瞬間は、汚さを通りぬけ、恐怖以外の何物でもない。ああ、想像するだけで、絶叫する。ヘタな三流のホラー映画よりも恐怖だ。
映画は架空だが、こちらは事実だ。体の毛穴からタバコの煙を出す男は、テレビの奇人変人に出演可能だろうが、体の毛穴か大便を出す男なんて、声を掛けてくれるどころか、街を歩いていたら、石や新聞紙やトイレットペーパーを投げつけられたり、除菌スプレーで霧吹き攻撃を受けてしまうだろう。
でも、変だな。
男は疑問に思う。老廃物等は、自分の体の中から排出されるのに、体の中にある時は、忌み嫌わ

れることがないにも関わらず、一旦、外界に出て、外の空気に触れた瞬間、人々は自分から遠ざけようとする。それは、自分自身を否定することではないのか。
　お腹の中にいた赤ちゃんは、生まれる前も、生まれてからも愛されるのに、何故、糞便は嫌われ、阻害されてしまうのだ。男は、糞便に対する愛情と哀しみと同情と、それを理解しようとしない、自分の以外の人間に対して、怒りさえ抱いた。あきらかに差別だ。糞便よ、噴怒の河を渡って、人間たちに復讐してやるのだ。
　男が頭の中で空想の世界に浸っている間にも、自然現象は滞りなく終わり、最後の塊が飛び出た。男は、いつものようにトイレットペーパーのロールを引っ張り、一定の紙を引きちぎると、鼻歌を歌いながら、残務処理を行い、排出物に目もくれずに、水洗ボタンを押した。

七　午後五時二十八分から午後五時四十三分まで　トイレットペーパーを愛用する女

　白いＹシャツに、黒いスラックスを履き、手にはビジネスバッグを持った若い女性が、すごい勢いで、俺（トイレ）の中に入って来た。
　ダダダダダ。女は、俺の中に入ると、時間を節約するためか、ズボンと下着を同時に下ろし、便座に座る。待っていましたとばかりに、おしっこが吹きだす。我慢していたせいで額から流れ出ていた冷や汗がようやく止まった。
「はあ」
　出る物が出て、落ち着いたのか、女は、今度は、目の前のトイレットペーパーに先をつまんだ。旅館やホテルなどの部屋のトイレは、掃除した後、ペーパーの先が三角形に折られていることがあるが、ここは、公衆用トイレだ。そんな、芸は施されていない。
　女の前に使用した人が破り散らしたのか、ペーパーは斜めに垂れ下がり、床には、少し大きめの雪の花のようなペーパーの残骸が散らばっている。
　そんなに、慌てなくてもいいのに。前使用者の行為を批判する。だが、女が思った瞬間、トイレのドアが、ドンドンとノックされた。引きつる女の顔。やっぱり、慌てなくてはいけないのだ。
　女は思い直すと、軽く中からドアをコンコンとノック返しをする。本来ならば、入っています、と声を掛けたらいいのだが、何だか、声を出すのが恥ずかしい。外にどんな人がいるのかわからないので、声は出しづらい。
　とにかく、急がなければ。
　出す物を出した後は、拭く物を拭かないといけない。女は目の前のロールを掴む、ぐるぐるぐるぐる。面白いように、紙が出てくる。
　ペーパーは、遊び相手が見つかった猫のように、ゴロゴロゴロと喉を鳴らしながら、回転し続ける。おかげで、女は、ピラミッドのミイラに変身できるくらいの紙の包帯をお腹に抱えることができた。
　大きいことはいいことだ、と昔、テレビで宣伝していたが、たかがお尻、正確には肛門を拭くのに、こんなにたくさんの量の紙はいらない。しかし、体全体を包む包帯には、少し短すぎる。ミイラには短し、お尻拭きには長し。昔の人はうまい譬えを言ったものだ。
　女は一瞬考えた。このまま、さらに、ペーパーを引っ張り続け、ミイラに変身するのか、それとも、お尻を拭くには長すぎる紙の長さを器用に折り畳んで、お尻を拭くか、だ。
　再び、ドアがノックされた。先ほどよりも音が強い。回数も二回から四回に増えた。何か、押さえきれない荒い息がしている。足音は短いサイクルだ。ランニングでもしているのか。トイレを待つ人を気遣って、いつの間にか、誰かがルームランナーでも置いたのか。
　だが、トイレの外で待たれると出る物も出なくなる。いや、用は済んでいる。でも、落ち着いて拭けない。きちんと拭かないと、下着に染みが付くし、あそこがむずがゆくなり、公衆の面前で掻いてしまいそうになる。それは恥ずかしい。そういうことは、人前でなく、この個室のトイレの中ですべきことなんだ。そのためにも、ゆっくりと拭かせてよ、お兄ちゃん。ええ、外で待

っているのは、お兄ちゃんなの？それとも、おじさん？はてまた、おばさん？女子高生？
　女は妙齢なので、トイレを出た後で、若くてかっこいい男性に出会ったら、恥ずかしくてたまらない。もし、排出の際の自分の臭いが残っていたらどうしよう？トイレから出る前に、この空気を臭いと一緒に全て吸いこんでしまわないといけない。もちろん、外にいるのがおっさんでもいやだ。若い女性のトイレの後を狙う、変態性格のフェチかもしれない。そんな奴だったらどうしよう。
　少々臭いがしても、やはり、この空気を全て、肺の中に吸いこんでしまうしかない。もしかしたら、おばさんかも知れない。むやみにドアをノックしたり、ドアの前で足踏みしたり、トイレの中にいる人を威圧するような行為をするのは、おばさんに決まっている。そうだ、おばさんだ。おばさんに間違いない。
　女も、将来的には年を取り、年齢的にはおばさんになるが、公衆トイレの前で、地団太踏むようなおばさんにはなりたくない。反面教師ならぬ反面おばさんだ。
　そんなことよりも、いつまでもトイレの中に閉じこもっているわけにはいかない。仕事の途中だ。女はバッグから手帳を取り出した、今日の訪問予定だ。午後六時に訪問を予約している。今は、何時？ポケットから携帯電話を取り出し、確認する。午後五時四十分だ。後、二十分だ。お得意さんは、ここから歩いて十分の距離だから。遅れることはないにしろ、いつまでも、便器に座っている訳にもいかない。外で待っている人のことよりも、まずは、自分のことだ。

　トイレは思う。ようやく、物語に登場できたことを喜んでいるわけではない。しかしながら、ようやく参加できたことは少なからず嬉しいと感じている。
　女は、ようやく、自分が今、しなければならないこと、つまりお尻を拭くことに気が付いたみたいだ。と、言いながらも、これまで、自分勝手な妄想で、時間を費やしたため、既に、ウォッシュレットで洗われたお尻は自然乾燥している。もう、拭かなくたっていいだろう。紙を使わなくたって、きれいに洗い流されているのだから。紙を使うなんてもったいない。ええ、やっぱり、紙でお尻を拭くの？ええ、やっぱり、俺の出番がもう終わっちゃうの？

　女は、目の前にあるトイレットペーパーの先を掴むと、今度は、消防士が火事の際、ホースを地面に転がすかのように、ペーパーを引っ張り始めた。ぐるぐるぐるぐる。先ほどと、同じ光景だ。ペーパーを折り畳むことなどしない。引き出されたペーパーは、縦・横・高さと二次元から三次元へと変形し、世界をビッグバンさせてやると息まいている。
　女は、ペーパーを無造作に掴むと、陰部に押し当て、そのまま便器の中に落とし。「何だ。俺の役割はこれだけか。この世界を変えようという俺の野望はどうなるんだ」と叫んでいるようなペーパーは、天敵の水の前で意気消沈し、二次元の世界へと戻っていく。
　そんなペーパーの思いを露とも知らない女は、腰を横に二回くねらせて、パンツとスラックスを同時に持ち上げると、水洗トイレのレバーを回し、先ほどの、空気を全て吸いこんでやるという気宇壮大な計画は忘れてしまったのか、そそくさとトイレから出ていった。

　再び、トイレの登場。トイレは、登場できたことに喜びを感じながらも、使用者に対する怒りも感じている
「おいおい、用が済んだらおしまいかよ。ごはんを食べ終わった時に、手を合わして、「ごちそうさまでした」と挨拶するように、手までは合わさなくてもいいけれど、「お世話になりました」のお礼ぐらい言ってもらいたいものだ」トイレは女に聞えないように呟きながら、舞台からフェードアウトしていった。

　憤慨する公衆トイレ。だが、得てして、人間は勝手なもので、その勝手を引き受けるのが、公衆の仕事なのである。その点を理解していない公衆トイレは、まだまだ若いとしか言いようがない。不満はあるだろうが、がんばれ、公衆トイレ。この物語の語り手だけが、お前のことはわかっている。臭くても、腐らずに、がんばるんだ。きっと、いいことはある。
　と、言いながら、さっきの女の次に、順番待ちしていた男がトイレに駆け込んだ。女が予想していたように、おばさんではなかった。心配していたような、若くて爽やかな青年でもなかった。中年のおっさんであった。おっさんではあるが、服装は短パンに、Ｔシャツ。靴はランニングシューズ。背中には、サブザッグ。顔には、ランナー用のメガネを掛けていた。

八　午後五時四十三分から午後五時五十二分まで　市民ランナーのおっさん

　Ａは、午後五時十五分の終業時間とともに、ランニングシャツ、ランニングパンツに着替えて、会社から飛び出し、会社の目の前にある中央公園でトレーニングを積んでいる。一周約三百メートル。体を慣らすため、ジョギングで軽く五周した後、所定の位置に付く。
　スタート地点は、公園のシンボルである松が植えられている場所だ。この松は、Ａが住んでいる市の市木だそうだ。市木だろうが、市花だろうが、、直接、自分の生活に関係ないが、自分のスピード練習のためのスタート、ゴール地点の目印としては重宝している。
　松が植えられている石垣から、右靴の先端で線を横に引く。ここが、スタートであり、ゴールである。左手に付けた腕時計をラップが測れるモードに変更する。いつでもスタートＯＫだ。
　Ａは大きく息を吸いこんだ。練習であっても緊張する。ランナーとしては、同じ練習を繰り返しながらも、やはり、昨日よりは今日の方が、タイムが短縮することが嬉しいのだ。昨日よりも今日のタイムが落ちていたら、昨日までの練習が無駄だったのではないか。
　Ａの脳裏にいやな思いが横切った。だが、そんな思いを強い意思が払拭させる。
いや、そんなことはない。たまたま調子が悪かっただけだ。好タイムとあまりよくないタイムが交互に出ながら、最終的には、実力がアップする、つまり、タイムが短縮するものなんだ、と無理やり納得する。
　Ａは五十歳を過ぎた。この年齢で、タイムが短縮すること難しい、いや、現状維持でも難しい。いや、タイムがなだらかに落ちていくことも難しい。
　Ａの足の筋力や膝は、ここ数年前から、膝まづいて泣き叫んでいるのだが、頭の中は、昔、計測したタイムの幻影が充満しており、自分が思うことは何でもなるのだと、おもちゃを欲しがる子どもが地面で転がって泣き叫んでいるように、自己主張している。
　現実を直視していない妄想の脳と、現実の厳しさに打ちひしがれている筋力たちとの葛藤。何の温情もなく、正確でかつ非情なタイムを打ちだす腕時計。この微妙な三者関係の中で、老いたランナーは走っているのである。
「よし、行くぞ」
　Ａは自分を鼓舞し、走り出した。と同時にストップウォッチを押す。目の前の風景は、毎日、見慣れたものだ。その風景が眼の中に拡大して飛びこんで来る。スピードが乗って来た証拠だ。快調だ。希望のタイムがでるか。わずかな登り。普段、歩いている時は気にはならないが、タイムを狙う時には、わずかの上り坂でも、筋力に負担がかかる。だが、これを乗り切れば、下り坂だ。この下りを利用すれば、スピードが加速できる。
　足をできるだけ前に前に出す。ひじをほぼ直角にして、腕を前後に振る。いや、腕を振ると言うよりも、腕を引く感じだ。肩Ｃ骨が動く。股関節が大きく動く。結果、歩幅が伸びる。体をやや前傾させる。もう、後半だ。あの植栽を左に曲がれば、最後の直線コースだ。ゴールの松が待っている。一秒で約五メートル進む。
ここが頑張りどころ、踏ん張りどころ、だ。普段の生活では、一秒なんて気が付かないうちに過ぎ去る。一秒どころか、一時間だって、一日だってあっと言う間に過ぎ去る。

　それなのに、走っている時の一秒は、時間が止まっているかのようだ。脳、口、喉、肺、腕、足など、体中の全ての器官が、一秒を感じている。その時間の総和は、一時間、いや一日以上なのかもしれない。
　ゴール。足で描いたゴールの線を通り過ぎる時に、腕のストップウォッチのボタンを押す。そのまま駆け抜け、体中を空気に投げだし、コースからはずれて、芝生の上を歩く。酸素が足りない。頭が白い。息が荒い。この息を芝生に吐き出す。芝生よ。この二酸化炭素が濃い息を原材料にして、光合成をして、俺に酸素をくれ。物々交換だ。文句ないだろう。Ａのまっ白な頭の中は酸素のことで一杯だ。
　Ａは、その場に崩れ落ちることなく、二十メートル近く歩いた。ようやく息は落ち着きつつある。折り返して、ゴールに向かう。もう一本走るぞ。ようやく、腕時計を見る。タイムは一分二十七秒。まあまあのタイムだ。次は、二十五秒は切るぞ。そして、最後の三本目は二十一秒を狙うぞ。
　息が上がっているにも関わらず、不思議なことに、二本目の方がタイムがよくなる。そして、三本目は、疲れがピークに達するが、最後と言うことで、踏ん張りが効き、思うようなタイムが出るのだ。

「はあああああ」
　Ａは芝生に膝まづいた。日課のスピード練習が終わった。残念ながら、今日は、自己最高記録の一分二十一秒のタイムを切ることはできなかった。二秒差の一分二十三秒だった。まあ、満足だ。
ささやかなことに満足を得ることができれば、人は前に向いて歩いたり、走ったりすることができるのだ。Ａは、そう呟きながら、タオルで額の汗を拭い、公園の水道の蛇口で顔を洗う。汗として放出された水分をわずかでも顔から補給をするためだ。
　次に、軽くうがいをする。「ゴロゴロ、ペッ。ゴロゴロ、ペッ。ゴロゴロ、ペッ」
うがいを三回した。走っている際は、呼吸のため大きく口を開けているので、病原菌等を吸いこんでいるおそれがある。以前、うがいをしないで放置していたら、翌日の朝、喉が痛くなり、熱が出て、病院にお世話になったことがある。風邪だから言ってなめてはいけない。
　うがいのおかげで、口の中の粘膜の乾きに、潤いが戻った。だが、喉までは水は届かない。水を口に含む。ゆっくりと水を喉に流し込む。スピード練習のため、うっすらとしか汗は出ていないのだが、体は過剰に反応し、水分を要求する。だだこねの体をなだめるかのように、ゆっくりと水を飲む。あまり飲み過ぎると、自宅に帰ってからのビールのうまさが半減するので、このくらいでやめる。
　Ａは、スピード練習後、クールダウンを兼ね、自宅までゆっくりと走る。
　その時だ。「ぐるるるる」
　お腹が洗濯機状態になった。お腹を押さえる。がまんしろ、がまんしろ。家まで後、三十分だ。家に帰ったら、温かい便座と温かいウオッシュレットが待っている。Ａは自分を励ます。
　だが、五分も走らないうちに、顔から脂汗が出てきた。体中の毛穴からもだ。これ以上、我慢

すれば、肛門以外の、体中の穴から排せつ物がでてきそうだ。足が前に出ない。頭が折れ、背中が曲がり、前傾姿勢のまま走る。いや、走るんじゃない。よた、よた、よた、よた、よたる。
　Ａは、二十代の頃、百キロマラソンに挑戦したことがある。走っているコース上で、右足が吊り、それでも、我慢して走り続けていると左足も吊り、その場で、つま先立ちのまま倒れ込んだことがあった。その時以上の苦しみだ。
人は、苦しみをその場限りで、忘れがちであると言うが、苦しみが、喉元を通り過ぎ、三十年近くの歳月を経て、肛門にまで至るとは、誰が思うおうか。誰も思うまい。
　肛門は、体の一部だが、もはや、脳の命令を聞こうとしない。扉の全開に向けて、止めがねをはずそうとした。まだ、脳の命令に従う右手が、お尻の二つのお山をサンドイッチして、放出を防いでいる。それでも、滲みでそうならば、指を突っ込んで、蓋をするしかない。だが、公衆の面前でそこまではできない。だが、公衆の面前で、噴水もできない。一体、どっちなんだ。
　それは、さておき（さては、おかないのは肛門である）、Ａは、ようやく、駅に到着した。私鉄の駅である。また、この駅はデパートにも併設している。いつもの帰りのコースではない。駅に行けば、トイレがあり、この苦しみから何とか逃れられるからだ。そうだ、トイレには神がいる。いや、紙があるのだ。
　本当は、デパートの中の清潔なトイレに行こうとしたが、そこまで辿り着く気力もなく、肛門の破裂までには一刻の猶予もなかった。駅と商店街の間をつなぐ、バスターミナルの一角にあるトイレに駆け込んだ。手を伸ばす。ドアのノブを掴んだ。
　Ａはランニングの練習のほかに、たまにプールで水泳も行っている。気分転換を兼ねるのと膝の痛みを和らげながら体力増強を図るためだ。水泳ならば、タッチすればゴールになるが、トイレはここからが勝負だ。
だが、ドアは開かない。中に誰かがいるのだ。確かに、鍵がかかっている証拠に赤い印が表示されている。
「何だ。この非常時に」
　Ａの頭がパニクル。
「いや、中の人間も、俺と同様、非常時かもしれない。なんて、俺はこの危機的状況にありながら、相手の気持ちを思いやるなど、冷静にいられるんだ。それよりも、このまま待つのか、それとも、駅の中のトイレに駆け込むのか、どちらを選択するかだ」。
　Ａは危機的状況に置かれながらも考え込んだ。駅に向かって走り出した瞬間、目の前のトイレのドアが開くことがよくある。かといって、このまま待っても、ドアが直ぐには開かないこともよくある。一体、どっちだ。いやいや、もっと冷静にならないと。
　ドアをもう一度叩いた、ノック返しに合った。
「うう」
　Ａの口から原始の叫びが漏れた。我慢できない。じっとしていられない。ジョギングを続けろ。何かで気を紛らわすのだ。冷静になれ。いや、冷静になりすぎて、顔が青ざめてきたような気がする。末期的だ。おお、神様。私を助けてくれ。困った時にしか、神様を呼ばないから、神様は俺を助けてくれないかもしれない。いいや、困った時だからこそ、神様にお願いするのだ。平

常時から、神様にお願いしていたら、神様だって、うっとおしがり、少しは自助努力しろ、と怒りだすに違いない。だから、神様、お願い。いや、待て。神様は、トイレの中にいるのだ。紙様だなんて。お後がよろしいようで。馬鹿やろう。こんな時に、いくら冷静でも、冗談を言っている場合か。

Ａは七転八倒しながら、トイレの前で待っていた。ついに、人生の崩壊の瞬間が来た。その時、お助けの瞬間も現れた。オープン・ザ・ドア。トイレのドアが開いたのだ。開け、ドアの呪文もないのに。ひょっとしたら、神様がＡの代わりに、呪文を呟いてくれたのかも知れない。

Ａの目は、開いたドアの隙間から便器に注がれた。だから、トイレの中に誰が入っていたなんて気にもならなかった。ドアの狭いすき間に二人の人物が交錯した。出る方は笑顔、入る方は顔面蒼白。まさに天国と地獄が同時に降臨した瞬間だった。

Ａは、中に滑り込むとドアを閉め、鍵をかける。いくら急いでいても、鍵をかけることくらいはできた。万が一、自分と同じようなランナーが、トイレを我慢できずに、このトイレに飛び込んできた時に、ドアを開けられたら、それこそ最悪だからだ。

「だが、待てよ。確かに排泄行為を他人に見られることに抵抗はあるものの、公衆浴場に入った時に、お尻を見られるのは、決して恥ずかしいことではない。ひきしまった尻もあれば、垂れさがった尻もある。小さな尻もあれば、大きな尻もある。千差万別だ。すると、状況によって、人は尻を見られることに恥ずかしさを感じたり、感じなかったりするわけだ。それは当り前だ。喫茶店や商店街、劇場などで、パンツを脱ぎ、お尻を見せたら、公序良俗に反したことで、警察に通報され、補導されてしまう。それならば、トイレに入っていて、お尻を見られたら、どうなるのだ。見た方が悪いのか、それとも、鍵をかけていなかったことで、見せた方が悪いのか。うーん。悩む」

ということは、逼迫した状況の男が思い付くことではない、これは、あくまでも、ト書きの私の感想である。ナレーターの私は、再び、事実関係を述べる。

Ａは、すぐさま、ランニングパンツを下ろすと同時に、便器に座る。鍵はかけた。これまで、外部からの圧力で、ビッグバンを押し留めていた肛門だが、主人公の脳が、ほっとため息をつき、全身の緊張が緩んだ瞬間、一点に凝縮された力が放出された。ドバドバドバなのか、ビュービューなのか、読書しながら、食事中の方もいらっしゃるので、擬音語は、控えさせてもらう。とにかく、Ａの額の脂汗が、例えば、強盗がガソリンを持って銀行に押し入り、床にガソリンを撒き、ライターはどこに入れていたのかなあ、と体中のポケットを探し回っている間に、ガソリンは跡かたもなく揮発してしまい、駆けつけた警察官に逮捕される時のように、あっという間に、額から消え去った。

トイレの天井には、目には見えないが、これまでの数々の人々の悪戦苦闘の修羅場によって生み出された脂汗の蒸気が溜まっていることだろう。そう言えば、微かだが白い霧のようなものが見える。後、何人かがトイレに入って来て、同様な取り組みが行われれば、「はい、おめでとうございます。あなたが、一万人目の入場者です」と美術館館長から記念の盾がもらえるように、他人の脂汗からなる、突然の雨の襲来を受けることになるだろう。それが、お目出度いことなのか、運が悪いことなのか、作者の私にはわからない。

とにかく、Ａはほっとした。体中の力を、肛門一点に集中していたことから解放されたのである。ある安堵感となすべきことをなしとげた後の達成感の裏側にあるけだるさを感じた。
「ほっ」Ａはため息をついた。これまで、溜めに溜めていた物が放出されたのである。もちろん、緊張のあまり、息も溜めていた。自分の体から放出されたものにも関わらず、臭いをかぎたくないと言う勝手な思いがあったのかもしれない。ついでに、ため口もつく。
「誰だ。俺の前に、トイレに入っていた奴は。トレットペーパーが散りじりになって、そこいらじゅうに落ちているじゃないか」
だがその声は、トイレの外までは聞えない。トイレの中で、わめき騒いでいたら、それこそ、公衆道徳に反する。人を批判する者が、人から非難されれば、かっこうがつかない。
Ａは、用を足していたので、それぐらいの平静さはあった。ただし、あまりのマナーの悪さに憤りは感じたのだ。その怒りは、自分の小さな胸には収まりきれず、トイレの中で、こだまが聞えるくらいの音がした。
「誰だ」「誰だ」「誰だ」「誰だ」
この声は、こだまの音であり、天井や壁から反射された自分の声でもある。
Ａは、まだお尻を拭いていないものの、座ったままの姿勢で、粉々になったペーパーを拾えるだけ掴んで、尻をわずかに浮かし、便器の中に放り込む。Ａは、ただ批判するだけの人間ではない。批判した事がらに対して、自分から動いてよりよい方向に導く人物である。読者の皆様には、この行動から、Ａの性格がわかっていただけると思う。
Ａは、とりあえず、目の前に散らかったペーパーを拾い終え便器の中に放り込むと、必要最小限のペーパーをたぐり寄せ、肌に押し当て、紙を手から離すと同時に、水洗のレバーを押し下げて立ち上がった。
ジャージの腰回りの部分は、膝の辺りにとどまっている。それを所定の位置にまで戻すと、まず、自分の排出物がきちんと流れていることを確認する。時々、排出物の一部が流れたくないと言う意思を持っているのか、白い便器の一部にこびりついていることがある。特に、粘着系の食べ物を食べた後に多い。
そんな時は、必ず、同じく、必要最小限のペーパーを取り、手が水に濡れるのも厭わず、便器の中に手を突っ込み、汚れをふき取る。
ほら、あなただって、公衆トイレに入った時、他の人の排出物がたまり水の中で浮揚していたり、一部がこびりついていたら、目をそむけるだろう。一度入った個室から出て、他の個室に移動する場合もあるだろう。だが、この公衆トイレは一つしかない。代わろうにも代われない。
だから、後から入って来た人のためにも、自分が汚したのならば、自分で清潔にするだけだ。用を足したランナーは、後を汚さず、だ。この行動からも、この男のきまじめさが、読者の皆さんに伝わることだろう。
Ａはトイレの中を隅々まで見渡す。他にゴミが落ちていないかを確かめているのだ。天井、よし。壁、よし。床、よし。指差ししながら、確認する。
先ほどは、自分の前の使用者に対し、ペーパーの片付けができていないことに対し怒りを感じていたが、よっぽど焦っていたのではないかと同情した。だが、その最中は慌てていても、後仕

舞は必ずするべきじゃないのか。やはり怒りを感じる。

　Ａはトイレのドアを引く。外には誰も待っていない。時間帯はラッシュアワー。帰りを急ぐ人々で混雑している。彼は、靴ひもの緩みがないのを確かめ、サブザックを背負うと、群集の中に走り去った。その中で、公衆トイレだけが、帰り道を忘れているかのように、ぽつねんと佇んでいた。

九　午後八時三分から午後八時三十七分四秒まで　酸素ボンベの女

今日も一日が終わった。

Ｂは眼を瞑った。だが、今日一日がどのようにして終わったのか覚えていない。便座に座ったまま、思いだそうとするが思いだせない。信号が赤から青に変わり、横断歩道を渡り、このトイレに入ったことは覚えている。だが、それ以前の、自分の行動は覚えていない。何もかも一度に思いだすことは無理だ。

Ｂは愛用のバッグからスプレー缶を取りだすと口に向けて噴射した。スポーツ選手がハードな練習をした後に使用する酸素供給用のスプレー缶だ。Ｂは、このずた袋のような布制のバッグと同様に、酸素スプレー缶を愛用している。仕事中でも、頭がパニックになれば、急いでトイレに駆け込み、スプレー缶を咥える。

子どもの頃から、もちろん記憶がある限りにおいてだが、何かに行き詰ると、頭の中がパニックになって、どうにも動けなくなった。先ほど、ほんの一時間、三十分前のことは忘れているのに、十年、二十年前のことは覚えているのは変な話だ。今でも、昔見たテレビマンガの主題歌がふとした瞬間に、口から出てくる。でも、さすがに全ては覚えていない。所々の歌詞が飛んでいる。その時は、適当にハミングして誤魔化している。

ハミング。それこそ、なんて懐かしい言葉だ。小学校の音楽の授業だったろうか。先生から、「さあ、ハミングしますよ」と言われて、口の周りに両手を当て、口をくちゅくちゅさせていたら、友だちに、「それ、何？」と尋ねられて、「だって、先生がハムスターの物真似しなさいって言ったじゃない」と答えたら、大いに笑われたのを思いだした。本当に、記憶って、いいかげんであり、残酷だ。埋葬許可をもらって、地中深く記憶の墓地に葬り去った恥ずかしい思い出を、本人の許可もなく、突然、ワープして、今、ここに現れるなんて。

ハミングの話はもういい。今は、酸素だ。酸素が足りないんだ。

Ｂは、スプレー缶のボタンをもう一度押す。シュー。気体が吹きだす。口を大きく開け、この気体を、一分子、一原子、一原子核、一電子、一素粒子も残らず、吸いとった。

「ふー」落ち着いた。代わりに、二酸化炭素を丸ごと排出した。吸って、吐く。この一連の動作が呼吸なのだ。吐くだけではいけない。吸うだけでも駄目である。吐いて吸う。吸って吐く。

それじゃあ、吐き続けたらどうなるのだろうか。やってみる。

「ふー、ふー、ふー、ふー」

次第に、ふーの音が小さくなる。そして、肺がちじみ、胃もちじみ、腸も、大腸も、食道もちじみ、体中の空気が排出され、最後は、喉がふさがり、両頬が引っ付き、唇が、舌ともども、突き出てしまうのかもしれない。まるで、顔が真っ赤なひょっとこ、だ。ひょっとこの自分の顔を想像してみる。思わず笑う。笑うと同時に、恥ずかしさのあまり想像することをやめた。

「すーすーすーすー」

今度は息を吸う。ほっぺたが膨らみ、喉が拡張し、胃は風船のように膨らむ、小腸は大腸となり、大腸はホースとなる。体の中の細胞は倍増し、連続していたはずの皮膚が、個々の存在を主張し出す。もうだめだ。仲間のはずの、約束は交わしていないが一心同体だったはずの細胞が

、新たな自分探しの旅に出そうだ。分裂の危機は回避できるのか。
　Ｂは、「す」を「ふ」に切り替えることにより、この重大な南極（誰が探検隊に加われと言った）、いや、重大な何曲（誰が、この切羽詰まった状況下において、カラオケをしているんだ）、いや、難局を切り抜けることができた。後、もう一回、別の「なんきょく」が口から出ていたら、芙由子は、今頃、霊安室で二度と目覚めることない冬眠状態に陥っていただろう。よかった、よかった。
　再度、確認した。呼吸は、吸い続けるものでも、吐き続けるものでもない。やはり、規則正しく、交代して行うものなのだ。
「ああ、酸素が欲しい」
　Ｂは、再び、スプレー缶を口に咥えた。ボタンを押すとひゅっと一吹き。頭の中の霞がかった景色が、酸素の風で追い散らさされたのか、遥か遠くまで澄み渡る。今日も快晴だ。いや、待って。今は、夜の八時過ぎだ。時間を確認しよう。ハンドバッグから携帯電話を取り出す。表面のデジタルのうち、一番左側が、八を表示している。確かに。八時過ぎだ。だけど、デジタルの表示が八を表示しているからと言って、本当に、時間が八時なのか、いつも疑問に思う。時計に支配されて、毎日、動かされているんじゃないのか。そんな疑念が沸く。
　左の手首を見る。手首にはアナログ時計を付けている。アナログ時計の秒針が一周を回る様子を眺めていると、追い立てられている気になる。もしも、自分が時計の中に入れば、秒針に背中を押されながら、酸素素スプレーを片手に、ずっと走り続けされているだろう。それも、ゴールがないまま、永遠の疾走、いや、スピードはないから、駄走かもしれない。
　そうだった。Ｂは、昔から、マラソンなど、走ることは苦手だった。足は遅かったし、息が上がると動けなくなった。冬場になると、体育の授業では。いつも学校の周囲を走らされた。その度ごとに、無理やり、咳き込んで、風邪の振りをして、ずる休みをしたものだ。どうしても走らなければならないときなんか、走り終わった後は、それこそ、口や鼻だけの呼吸では足りずに、両手両足を使い、「酸素が足りない。酸素が足りない」と喚きながら、自分の周りの空気を掴むこともできないのに、手や足で口の中に放り込んだものだ。
　その時のことを、今、思い出すと恥ずかしさで一杯だ。だから、恥ずかしい姿態を見せたくないがために、こうして、今は、酸素スプレー缶を常備している。でも、よく考えれば、酸素スプレー缶をハンドバッグに保管している女なんて、珍しいし、これが人に知られたら、変な奴のレッテルを張られてしまう。一度着いたレッテルは、他人が張り付けた物だけに、なかなか剥がせない。一生、ついて回るものなのだ。
　その点、時計のデジタル表示は、追い回されるような印象はない。だけど、次々と、数字が変わっていくのも可笑しい。通常の時計なら、時間は進んで行く、過ぎていくものと認識できるけれど、デジタルは、数字が変更していくので、過去と現在と未来が続いているような気がしない。譬えて言えば、今が、八時三十五分三十一秒。眼で確認している間に、八時三十五分三十二秒に変わった。そう、表示が変わった。つまり、八時三十五分三十一秒は、八時三十五分三十一秒の世界があって、八時三十五分三十二秒は、八時三十五分三十二秒の世界があり、それぞれが独立した世界を築き、互いに何の関係性、関連性はない。

　それじゃあ。八時三十五分三十一秒の世界で生きていたＢと、八時三十五分三十二秒で生きていたＢの関係はどうなのだろうか。同一人物でありながら、同一人物ではない。八時三十五分三十一秒の世界のＢは、幸せに満ちていたけれど、八時三十五分三十二秒の世界のＢは、不幸のどん底なのかもしれない。
　Ｂがあれこれと考えているうちに、八時三十七分三秒の世界にやってきた。時間で輪切りにされた人間は幸せなのか。それとも不幸なのか。
「ああ、息が苦しい」
　Ｂは、再び、酸素スプレーを口に咥えた。
「シュー。シュー」
「酸素が足りない。酸素が足りない。この世の酸素が」
　Ｂのひとり言クラブは、次の来訪者が来るまで続く。

十　午後十一時三十三分から明け方まで　オラは酔っちまっただの男

　またか。Ｃは呟いた。時計を見る。最終電車は十一時半。今は十一時三十三分。三分遅れた。カップ麺が出来上がるのを待つくらいわずかの時間だ。もちろん、Ｃがカップ麺が出来上がるのを待っていたために、電車に乗り遅れた訳ではない。
　Ｃは、最終電車には必ず乗ろうと飲み会は十一時に切り上げた。居酒屋から駅まで十分間。駅まではちゃんと歩いて来た。無性に喉が渇いた。駅前のベンチに座った。駅の構内に入ろうと思ったけれど、最終便には大勢の人が乗る。顔見知りも多い。顔が真っ赤で、千鳥足の姿を見られたくない。Ｃは、缶コーヒーを飲んで、酔いを少しでも覚ましたかったのだ。
　自動販売機に近づく。
「もう、ホットコーヒーが販売されているのか」
　季節は秋。日中は、日差しに当たれば、暑いものの、太陽が沈んだ朝晩は冷える。温かい飲み物が欲しくなる頃だ。だが、Ｃにとって、今は違う。アルコールの力で体中が燃え盛っているのか、熱い。夜の風がひんやりとして心地いい。だがこれくらいでは、酔いは冷めない。体の芯から表面まで、アルコールのマグマが噴出している。いくら体の表面から冷まそうとしても冷めない。周囲から冷やそうとしても中までは届かない。それならば、直接、冷却物を投入するしかない。
　Ｃは、冷たい缶コーヒーのボタンを押す。
「ガシャン」目当ての物が取り出し口に落ちる。
　Ｃはいつも思う。普段の状態ならばいいけれど、酔ってふらついている時には、しゃがんで缶コーヒーを取り出すのには、よいしょがいる。そう「よいしょ」という掛け声が必要なのだ。
　Ｃは膝を折り、腰をかがめ、背中を曲げ、右手で缶コーヒーを掴む。掴んだ後は、背中を伸ばし、腰を伸ばし、膝を元の位置に戻す。酔った状態では、この一連の動作が苦痛なのだ。まさに、酔って缶コーヒーは飲むなと言わんばかりの仕打ちではないか。
　お金の投入口は腰高なのに、缶の取り出し口が膝の辺りとは、納得がいかない。これが反対に、お金の投入口が膝下辺りで、缶の取り出し口が腰高だったらどうなるだろう。わざわざ、腰を曲げてまで、お金は投入しないだろう。当然、自動販売機の売り上げは大幅に減少する。金さえもらえれば、それでいいのか。利用者の気持ちを考えていない。
　全国の自動販売機業者に告ぐ。今すぐに、缶の取り出し口を腰高の高さにしろ。そうしなければ、俺は、もう、二度と、金輪際、最後に、最終で、決して、缶コーヒーを購入しないぞ、とＣは思ったけれど、今は酔いを醒ますのが先決だ。ここは、折れるしかない。
　再び、「よいしょ」の掛け声で、缶を取り出し、ベンチに座る。今、時間は十一時十五分。まだ余裕がある。駅の中に入るのは五分前でいい。残り十分間は、ゆっくりとコーヒーを飲み、このフォッサマグマを氷づけにはできないけれど、温泉並みの温度には下げられるだろう。
　Ｃは両手両足をだらんと投げ出し、腰と椅子の背もたれの間に三角形の空間を作った。Ａにとって、この態勢が一番楽な姿勢なのだ。何もかも投げ出しながら、口腔から喉に、食堂に、胃に、冷たいコーヒーを流し込む。美味しいというよりも冷たいと言ったほうがいい。コーヒーを飲

みたいのじゃなく、ただ単に、酔いを覚ましたいだけなのだ。体の中を冷やしたいだけなのだ。
　筋肉を弛緩させた姿勢のまま、目を閉じた。頭の隅では、後、八分だぞ、五分だぞ、三分だぞ、ともう一人の自分が目覚し時計として囁やいてくれる。しかし、耳の穴にダイナマイトをぶち込んだほどの音ではないために、頭脳は睡眠を加速させる。後、一分だぞ、という声が聞えた瞬間、意識がなくなった。
　Ｃがそれから四分後の世界に登場した。ズボンのポケットから携帯電話を取り出し、時間を確認した。十一時三十三分。
　急に、だらんとした体がシャキッと立ち上がり、駅の改札口に向かうが、最終便が出た駅は閉鎖されていた。奥の事務所で、駅員がＣと目を合わさないよう顔を下に向け、慌ててボールペンを握り、ノートに何かを書き付けている。いや、振りをしている。Ｃは駅員の姿を見たが、声を掛けなかった。
　やってしまった。今年に入って三回目だ。Ｃは元のだらんとした状態に戻り、先ほどの椅子に戻った。帰る手段は、タクシーかテクシーしかない。タクシーは金がかかり、テクシーは時間がかかる。どちらも嫌だ。どちらも選ばないのならば、今宵一晩、駅のベンチで過ごすしかない。だが、このベンチで横たわる訳にもいかない。駅員に追い出されるし、ぶっそうだ。金もかからず、安全に一晩を過ごす場所はないのか。
「仕方がない。また、あそこで過ごすか」
　Ｃは立ち上がり、駅を後にする。駅は二階だ。階段を降り、コンビニに入る。売れ残っていたスポーツ新聞と夜中に目覚めた時に喉が乾かないようにお茶のペットボトルを購入する。
コンビニを出た所で、明日のゴミ収集に備えてか、新聞紙と段ボールが積み重ねている。その中から、手頃の大きさの段ボールを一枚抜き、バスターミナルに向かう。
　ターミナルには、人はほとんどいない。既に、バスの最終便は出発している。だが、自分と同じような酔っ払いが、最終便の電車やバスに乗り遅れたことも知らずに、ベンチで酔い潰れている。Ｃは「自分は、ああいう風にはなりたくはないぞ」と、ガンガン鳴り響く頭の中の鐘を静めて、ターミナルの隅にあるトイレに向かう。
　Ｃは、吐きたいわけでない。今日の飲み会も、固形物はろくに喰わずにビールばかり飲んでいた。こうした飲み方は体によくないのだが、一旦、飲みだすとやめられない。アルコール中毒症気味だと感じる理性は頭の隅っこに追いやられ、アル中魂が脳の中心部を占拠し、アルコール、アルコールというアジテーションが声高に叫ばれる。
　味もなにもかもわからずに、ただ、ビールだけが喉に、胃に流し込まれた。その結果、最終便の電車も駅から流れていった。
　Ｃはトイレのドアを押した。いつものように空いていた。意外な穴場である。いつも、通勤でこのトイレの近くを通っているが、このトイレの存在には気が付かなかった。朝は、遅刻しないように、早足で、また、通勤通学の人々に押し流されているため、周囲を見渡す余裕がないのだ。たまたま、最終便で乗り遅れ、バスターミナルをうろうろしていた際に、トイレの存在に気付いたのだった。それ以来、このトイレの愛好者になっている。
　いや、別に愛好している訳ではない。たまたま最終電車に乗り遅れて、タクシーに乗る金やホ

テルに泊まる金もなく、歩いて帰るだけの体力もないことから、公衆トイレで夜を過ごしているだけである。

朝、一番の始発電車に乗れば、自宅に帰って、シャワーが浴びられ、汗とアルコールが適度に混合された臭いが、少しは消し飛ばされだろう。昨日の蛮行も、会社の同僚からは、品行方正名に夜を過ごしたと思ってくれるにちがいない。そのためにも、早く寝るぞ。そして、早く起きるぞ。それこそ、朝一番の始発電車に乗り遅れたら手遅れだ。

Ｃは段ボールを便座に置く。断熱材変わりだ。寒い冬の到来はまだだが、秋に入って、朝晩の冷え込みがめっぽう厳しくなった。段ボールを引くのと引かないのとでは、寒さの感じ方は全く違う。それに、段ボールをタンクにまで伸ばせば、背もたれにもなる。ちょっとしたリクライニングシートだ。しかも、個室トイレ付。どうだ、いい思い付きだ。これで、トイレ発、大阪行き、いや、東京行き、いや銀河行きの鉄道に乗れそうだ。今から、わずか六時間で、宇宙の果てまで行って、しかも、無料で、帰って来られるのだ。

足を延ばす。足が壁に突っかかる。膝が曲がる。自分の足の長さに驚く。何だか、自慢したくなる。だが、電車に乗っていて、たまに、小学生が横に並ぶときがある。小学生は、自分よりも頭一つ分背が低いにも関わらず、腰の位置は同じだ。つまり、自分の足が、小学生に比して短いということだ。自尊心が崩れた。こんな時に、自分の足に長短について、冷静に分析しても仕方がない。

Ｃは眼を閉じた。瞼には、星がきらめいている。カシオペア座に、北斗七星、北極星も見える。知っている星座を全て並べた。大熊座も小熊座も、はくちょう座も知っているぞ。星座の名前は覚えているものの、大人になってからは、特に、会社に就職してからは、夜空を眺めることなんてなくなった。

さあ、寝るか。Ｃはトイレの明かりのスイッチを消した。天井には、まだほのかに明るい蛍光灯が白く浮かび上がり、男の夢を応援しているようであった。

十一　時間外の小ネタ

大便と小便を一緒にできない人がいる。大便をすることに一生懸命になり、小便をすることを忘れ、パンツを上げ、ズボンを履き、便器の中の浮遊物を一瞥すると、水を流す。いつも、ズボンを履く前に水を流すべきか、いやいや、少なくとも、さっきまでは自分の体内にいた同志に、何の挨拶もなくさよならするのはいかがなものかと、凝視するまではないけれど、敬意を込めて一礼をする。もちろん、その際に、国歌は歌わないし、国旗も掲揚しない。もちろん、「蛍の光」も歌わない。

ただし、いつものことだが、水を流した後、残尿感に襲われる。さっき、大便と一緒にしたじゃないか。見つめていたはずのパンツが答える。そうだったかなあ。その人は不安になり、ズボンに尋ねる。しっこしたかなあ。ズボンが答える。俺は便器の中を覗いていないよ。音がしたような、しないような、わからない。身をよじりながら答えてくれた。

その人は、ますます不安になる。そんなに疑うならば、もう一度小便をすればいいじゃないか。あきれ顔のパンツ。ズボンに、悪いなあ、と謝り、チャックを下す。隙間から一物を取り出し、再度、白い便器に向かう。便器の方は、どうせなら一度にやってくれ、水も電気代ももったいないじゃないかと怒っているように見える。

でも、生理現象だから、仕方がないよな、と理解もしてくれる。その人は、用を済ますと、同じ個室内で、二度目の水を流す。安堵感といたたまれなさを感じ、トイレを後にする。おーい、うんことおしっこよ。次は、仲良く一緒に出てくれ。その人は祈るような気持ちで、トイレを後にした。

十二　仕分けされた公衆トイレ

「もういらないんじゃないですか」
　委員からの厳しい言葉が叩きつけられた。
「私どもといたしましても、必要性や費用対効果などを、再度、調査いたしまして、施設の廃止等について、検討してまいりたいと思います」
　慎重かつ遠回しな言い方で役所側が答える。
「何も、全ての公衆便所を廃止・撤去しろと言っているわけでないですよ。あの駅前の、バスターミナルにあるトイレについて言っているんですよ。駅の中には、トイレはあるし、デパートが開いていたら、デパートにだってトイレはあるし、商店街にも、公衆トイレはあるじゃないですか」
「デパートのトイレは、民間の管理所有でして、私どもが、利用を促すと言う訳にはいきません」
「だって、中途半端じゃないですか。あのトイレは、男女共有だし、今頃、男女の共有の施設なんて、セクハラそのものじゃないですか」
「場所等の関係もありまして、増設は困難かと存じております」
「誰も増設なんて言っていません。無駄です。さっさと廃止にしなさい」
　委員長が取りなす。
「まあ、まあ。そう感情的にならなくても。役所の人も汗をかいているじゃないですか」
　説明していた公衆トイレ担当の課長が、ポケットからハンカチを取り出している。
「無駄を排除するのが事業仕訳の真骨頂です。このトイレの維持管理費は、私たちの税金で賄われているわけです。必要がないものは削除する。そして、必要な所にお金を回す。回すところがなければ、税金を下げる。それが私たちの使命です。役所に限らず、どんな組織でも、一度、始めてしまうと、それが当然と思ってしまって、自分たちで見直すことはできないんです。だから、私が、私たち委員が代わりに見直しをしてあげているんです」
　憤然とする委員。俯く役所側。列席者の顔を見回す委員長。
「まあ、あなたの意見も十分わかりました。他に意見はありませんか。特に、この地元で住んでいる市民の代表の方からも意見をいただきたいですね。乙さんは生まれてからこれまで、この街に住んでいるそうですね。何か御意見はないですか」
「はい。確かに、市内各地に、公衆トイレがあることは知っていましたが、駅前のバスターミナルに、トイレがあることは知りませんでした」
「丙さんはどうですか？」
「私は、バスターミナルのトイレについては知っていましたが、使用したことはありません。でも、信号待ちで、急にトイレに行きたくなった人が入るのを見掛けたことはありますね。あれば、ありがたいんでしょう」
「あればあるのは、何でもありがたいです。例えば、道路の十メートルおきに、公衆トイレがあれば、ありがたいですよ」

先ほどの廃止強硬論者が委員長の許可も得ずに、しゃべりだす。
「そんな極端な」
丙委員が呟く。
「極端な例をあげないと、役所の人たちは、わからないんです。市民の方も同じですけれどね」
強硬委員の声が激高しだす。
「ありがとうございました。皆さんの意見はわかりました」
委員長がその場をおさめた。
「時間もまいっているようですので、採決したいと思います。この公衆トイレ事業については、継続か、廃止か、見直しかの三点です。挙手でお願いします。それでは、継続の意見に賛成の方。誰もいませんね。次に、廃止の方？」
先程の強硬廃止論者の委員だけ手を挙げる。右手だけでなく、左手も挙げる。だが、二票は獲得できない。
「一人ですね。最後に、見直しの方は？。七人ですか。はい。わかりました。それでは、公衆トイレ事業については、見直しということでお願いします」
「委員長」
廃止に賛成した委員が降ろした手を挙げた。
「はい。どうぞ」
「多数決には従い、見直しには同意しますが、あの公衆トイレについてだけは、廃止だと条件をつけてください」
委員長が各委員の顔を見回す。各委員も、これ以上論議しても時間の無駄だと、仕方がなさそうに、頷く。
「それじゃあ、公衆トイレ事業は見直しで、かつ、駅前のトイレについては廃止ということで、決定したいと思います。以上をもちまして、公衆トイレ事業の事業仕訳を終わります。皆さん、長時間にわたり、活発な議論を尽くしていただき、ありがとうございました」
全員が席を立つ。強硬廃止の委員は、自分の意見が通ったことで笑みを浮かべている。他の委員はようやく終わったことでほっとした顔だ。行政側は無表情のまま、何かひそひそと打ち合わせしていた。

しばらくして、あの駅前のトイレの前には、「この公衆トイレは、三月三十一日をもって、閉鎖、撤去します」という張り紙が貼られた。

十三　事業仕訳後　その一

　久しぶりの登場のトイレ。登場するや否や、愚痴をこぼし、文句をタラタラの発言。わずかな登場時間を楽しむ余裕はない。
「おい。誰だ。俺のドアに張り紙をしやがった奴は。外側に張っているから、中身が見えないじゃないか。サロンパスか？俺のドアは、筋肉痛じゃないぞ。それとも、ドアが壊れているのか。それなら、さっさと直してくれ。変な張り紙をされちゃあ、かゆくて仕方がない。誰か、早く、取ってくれ。それと、その張り紙に何が書いているのか、誰か教えてくれ」
　トイレは、張り紙が貼られて以来、悶々とした日々を過ごすのであった。

「あーあ。あたしの仕事も三月までか」
　松川は、ため息をつく。
「この仕事、気にいっていたんだけどな。ビルの掃除の仕事はしていたけれど、ビルの階ごとで、掃除の担当を決められていたので、何だか比較されそうだし、責任者から監視されているようで、気が休まらなかったのにねえ。その点、この公衆トイレは、人通りの多いターミナルだけど、意外に空いていて、他の場所からも離れていたので、せかされることなく、十分に掃除ができた。
　もちろん、あたしは手抜きなんかしないよ。便器に汚れがついていたら、自分の顔が映るぐらいに、ピカピカに磨いたよ。便器の周りだって、女のあたしにはわからないけれど、男の人は長いのか短いのか、それとも、放水の勢いありすぎるのか、勢いがないのか、便器の周囲に黄色い液体が垂れていることがよくあった。床の上に、新しい川や池が生まれていた。天地創造って、このことかな。知らないお客さん（そう、あたしにとって、このトイレを使用してくれる人はお客さんだ）は、皮靴やランニングューズにつけたまま、外の世界に踏み出してしまう。みんな用を足したいとあせっているのか、意外にも、足元のおしっこに気がつかないんだよね。
　運よく気付いた人は、便器をまたぐようにしておしっこをしたり、便器から離れておしっこをするので、結局便器の中に命中せずに、川が大河となり、池が湖になってしまう。床面が海になると、お客さんは、ひと目見ただけで、このトイレには入らずに、近くの駅の中のトイレやデパートの中のトイレに駆け込み込むことになる。
　誰かに使用され、誰も使用しないトイレをきれいにするのが松川の仕事だ。プーンと鼻をつくアンモニアの臭い。口にしているマスクの上を少し上に引っ張り上げ、少しでも直接的に臭いを吸収しないように防ぎ、絹ではなく、木綿のぞうきんで汚れをとる。
　あまりにも汚れがひどい時は、ホースで水を撒き、床を全面清掃することもあった。様々な思い出が頭によぎる。松川は、柄のついたモップの柄の先に、両手を置き、あごを乗せ、思いにふける。
「あたしはどこの掃除の場所に移されるのかな。近くの駅のデパートにも仲間がいる。そこでもいいな。それとも、このトイレと同じように、あたしも処分されるのかな。とにかく、三月一杯までは、一生懸命、自分に与えられた仕事をこなすそう。そして、自分に仕事を与えてくれたト

イレに恩返しをしよう。壊されることがわかっていても、いや、壊されるからこそ、反対に、ぴかぴかに磨いてあげるんだ。光輝くトイレを見たら、壊す方も壊しづらいだろう。さあ、思い立ったら、行動だ」
　松川は、再び、絹じゃなく、木綿のぞうきんで床を、これまで以上にきれいに磨き始めた。

　トイレは聞いた。真実を。
「何だって。トイレを壊すんだって。これは聞き捨てならんぞ。これまで、多くの人に、赤っ恥をかかないよう、排出の場所として提供しただけでなく、時には、無料で宿泊させてやったり、時には、相槌は打たないけれど、黙って愚痴を聞いてあげたり、時には、伴奏もなく、アカペラだけど、エコーの効く閉所で、カラオケボックスの代わりになってやったり、時には、ダンスの練習会場になってやったりなど、全市民の憩いの場所として、君臨してきた、この俺様を処分するだって。一体、行政は、世間は、社会は、国は何を考えているんだ」

　トイレの怒りはもっともである。ト書きの私も、もし、自分がトイレならば、怒らざるを得ない。これまでの物語を読めば、いかに、この公衆トイレが、人々の役に立っていたかがわかる。この公衆トイレの廃止論者は、この地の市民ではないではないか。全国を放浪して、好き勝手に自分の意見を垂れ流しているだけであって、このトイレが廃棄処分された後の責任はとれないし、取ろうという意思もないだろう。おっと、思わず、客観的でなければいけないト書きが、自分の感情的な意見を披露してしまった。申し訳ない。さあ、話を元に戻そう。

「ええ。このトイレ、三月末でなくなるの」
　悲痛な声を上げたのは、風船使いの女、町川であった。
「これまで、この公衆トイレで、満たされない旅への思いを、風船を小道具にして、夢の中でかなえてきたのに・・・。それができなくなるなんて・・・。それが叶わないのは仕方がないとしても、この公衆トイレが壊されるのは忍びないなあ。今まで、使わせてくれたお礼に、せめて、このトイレを逃がしてやりたい。でも、あたしに何ができるの？」
　三好は考えた。
「そうだ。あたしにできるのはこれぐらいだ」
　三好は、ハンドバッグから黄色い風船を取り出すと、膨らまし始めた。その数、一個、二個、三個、エトセトラ、ケセラセラで、立て続けに二十個ができた。
「それにしても、このトイレ、三月で取り壊されるにしては、前にも増して、きれいに磨かれているなあ。きっと、あたしと同じように、このトイレにお世話になった人がたくさんいて、恩返しをしているんだ。あたしも、負けずにやるぞ」
　三好は、できたてのほやほやで、まだ、息のあたたかさが残っている風船を持つと、公衆トイレのあちこちに結えた。ひょっとしたら、風の力で風船が空に浮き、取り壊されないように願いを込めて。

「なんだ。このトイレなくなるのか」
　順之助は今日も座薬を入れながら、呟く。
「何か、あった時に、このトイレ便利だったんだけどな。でも、使用頻度から言えば、無駄なのかもしれんな。でも、やっぱり、何かのために、公衆トイレはあるんだろう。きっと、何かのために。多分、廃止しようとする奴は、このトイレが役だっていることを知らないんだ。このトイレの有効性、有用性をもっとＰＲすればいいんだ」
　順之助は、座薬を入れると、外に出た。顎の手のひらを乗せ、自分にできることはないかと立ったまま考える人になる。ぴっかぴかのトイレ。それに、黄色や赤色、青色など多彩な色の風船で飾られたトイレ。
「この他に、俺がトイレに出来ることは何なんだ。あっ、そうだ」
　順之助は、ポケットから、たまたま持っていた油性マジック（作者の御都主義と避難して欲しい。作者としても、読者に違和感なく物語が続けられるよう、あの手この手、そのボールペン、どのマジックと一晩、二番と、ゆっくりと睡眠をとって考えているのだ）を取り出すと、警察や消防署、病院、市役所、老人ホームばど公共施設などの連絡先を、風船の表面に書いた。
「よし、これで、このトイレの有用性がお役所にもわかるだろう」
　順之助は、また、先の方が出かかった座薬をズボンの上からお尻の穴に押し戻すと、その場から去った。

「何か。何か、恩返しをしなくっちゃ」
　あかりは思った。でも、何をしたらいいのか、思い付かなかった。自分が悲しい時、この場所は、彼女にとっては、天使の場所だった。確かに、ダンスの練習場所として最適だった。だけど、それは、ひとつの方便だった事に気が付いた。他人から干渉されない、自分自身と向きあえる場所が欲しかったのだ。仕事の事、離婚の事、これからの将来の事、年老いて行く両親の事、そして、好きなダンスの事、など、エトセトラであり、どうにかなるさ、ケセラ、セラ　である。
　でも、まさか、この公衆トイレが取り壊されるとは思わなかった。だが、全て、生まれた以上は、消えていくものである。このあたしだって、まだ元気な両親だって、あたしが住んでいる地球だって、照りつける太陽だって、無限に広がる宇宙だって、終わりはあるのだ。それが、長いか、短いかの違いである。終われば終われで、そこから、また、始まればいいのだ。
「それじゃあ、あたしにできることは、何？」
　周囲を見回す。便器から、水のタンク、床のコンクリート、天井、ガラスまで、ぴかぴかに磨かれたトイレ。そして、そのトイレを包む、赤い風船。風船には、公共機関の連絡場所が書かれている。
「そうだ。いいものがあった」
　あかりは、バッグから花を取り出した。造花だ。ダンスの際、頭に付ける飾りの赤い花だ。ささやかだけど、ほんのささやかだけど、飾ってあげよう。
　あかりは、ドアのノブには花飾りをつけた。三歩後ろに下がる。うん、これはいい。十歩後ろ

に下がる。やっぱりいい。風船の派手さには負けるけれど、さりげなさが、あたしには似会っている。
　あかりは、そう納得すると、トイレに背を向け、仕事場に戻って行った。足取りは軽く、どういうわけか、スキップを踏んでいた。スキップなんて、久しぶりだ。頭は忘れていても、足は覚えていたのだ。お陰で、あかりの心までスキップした。

「ブウ」
　煙が鼻から出た。フウじゃない。ブウだ。だけど、そんなタバコを吸う楽しみももうすぐ終わりだ。何しろ、このトイレももうすぐ取り壊しの運命にある。今まで、禁煙場所にも関わらず、タバコを吸ってきた。それを誰かに見られて、役所に通報されたのかもしれない。タバコの吸い殻は決して、床には捨てずに、携帯タイプの吸いがら入れに片付けてきたはずだ。だけど、今さら、何を言っても仕方がない。このトイレは取り壊されるのだ。もう、街中で、タバコを吸うことはほとんどできなくなる。
　男はタバコを吸いたくて吸っていたわけじゃない。気持ちを落ちつかせるために、吸ってきたのだ。もうやめどきか。このトイレと同じように、タバコを吸うのもやめどきなんだ。何か、外圧がないと、今までの習慣や行動を変えられないのは、日本人の性格なんだ。ペルーの来航で、鎖国が解き離たれた。それと同じだ。
　男は笑った。なんで、トイレが壊されて、タバコをやめるのと、ペルーの蒸気船の来航で日本が開国したことが結び着くんだ。それに、ペルーなんて人名を口にするのは、中学校以来、何十年ぶりだ。ホント、朝、何を食ったのか忘れているのに、今さら、ペルーのことを思い出すなんて。
　それはいいとして、男はこのトイレのために何かしたかった。以前と比べて、見違えるようにきれいになったトイレ。外には、風船が飾ってあり、風船には、これまでお世話になりました、これからも頑張ってください、なんて、色紙に書くような文面が記載されている。また、ドアのノブには赤い花が飾っている。このトイレが、取り壊されるなんて、信じられない。
　男は用を足すと、トイレの回りを一周した。俺にできることはこれくらいか。男の手には、空き缶と新聞紙とタバコの吸い殻があった。男は、空き缶は近くの自動販売機のゴミ箱に、新聞紙とタバコの吸い殻は、駅の構内のゴミ箱に捨てた。少しは恩返しできたかな。どうせ、また、汚れるだろうけどな。
　男は、トイレを遠くから一瞥すると、仕事場に戻って行った。

十四　事業仕訳後　その二

　若い女が、今日も、白いＹシャツに、黒いスラックスを履き、手にはビジネスバッグを持って、すごい勢いで、トイレの中に入った。
「ダダダダダダダ」
　同じくらいの勢いで、トイレットペーパーの紙を引っ張る。
「ガタガタガタガタ」
　トイレのフォルダーが回る。
　一連の動作が、前回と同じように終わり、女は立ち上がって、水洗のレバーを回した。女は落ち着いたのか、思い出したように、ふと、口にした。このトイレ、取り壊されるんだ。もう、飛び込みで、このトイレは使用できない。まあ、近くの駅やデパートにもトイレがあるからいいか。でも、こんなに、激しくトイレットペーパーは巻き取れない。
　女は自分の癖は知っていた。知っていたけど、直せなかった。ある意味、トイレットペーパーを思い切り、引っ張ることに喜びを感じていたのかも知れない。もう、変な癖は止めよう。女は心に誓うけれど、たぶん、同じことを繰り返すような気もした。
　それよりも、お世話になったこのトイレに何か恩返しをしたかった。トイレに中は、お掃除のおばさんのおかげできれいだ。外には、風船がデコレーションされ、ドアのノブにも造花が飾られて、トイレの周りには、空き缶も新聞紙もタバコの吸い殻も落ちていない。なんだか、自分のすることが全て他人になされていた。でも、何か、できるだろう。
　あった。これだ。女は、トイレットペーパーの先を、ホテルのトイレで見かけるように、三角形に折った。ささやかな恩返しだった。でも、ささやかだけど、自分にできることはこれだと思った。そして、外に出ると、トイレに向かって一礼した。何事にも、感謝の気持ちが必要だ。
若い女は、次の営業先へと向かった。

「いち、にい、いち、にい」
　トイレの中で、男がアキレス腱を伸ばしたり、肩を回したり、手首を振ったりしている。言わずと知れた、マラソンランナーのＡである。先日、急に腹痛が生じ、このトイレに飛び込んで以来、中央公園での練習が終わり、自宅へ帰るまでの間に、必ず、立寄るようにしている。ひよっと、再び、あの悪夢が甦られないように、腹痛がなくても立寄るようにしている。
　だけど残念だな。このトイレは三月末に撤去されちゃうのかよ。まあ、仕方がないな。もし、急に腹痛が起きたら、駅の構内のトイレでも飛び込むか。ここは、ランニング姿でも、誰にも見られず、気兼ねなく入れるからよかったんだけど。
　Ａは、お腹を撫でながら、今日は大丈夫だなと安心すると、トイレから出ようとした。「ちょっと待てよ」
Ａは、このトイレの中が、今まで以上に清潔で、トイレットペーパーの先が三角形に折られていること、外は、風船や花で飾られ、周囲には、空き缶どころか、落ち葉さえないことに気付いた。

　自分以外にも、このトイレを愛用している人がいたんだ。Ａは、ふと、嬉しくなった。と、同時に、自分もこのトイレのために何かできないかと考えた。考える時は、やはり。うーん、だ。
「うーん、うーん、うーん」
　頭をひねるが、あまりいい考えは浮かばない。それなら、自分の身近にあるのもではどうか。Ａはバッグを降ろし、中を物色する。
「あった」
　まだ使用していないタオルだ。それもブランド物だ。いつも、万が一のため、一枚予備として持っているのだ。
　Ａは、タオルを掴むと外の手洗い所のタオル掛けに吊った。タオル掛けがあるなんて、思ってもいなかった。そりゃそうだ。今まで、タオルが掛けられているのを見たことはなかったからだ。小人の鉄棒か何かと思っていた。それは、冗談だ。人間って、見ているようで、見ていないものだと改めて納得する。このトイレも、あるんだけどないように思われて取り壊しされるんだろう。ひょっとしたら、自分だって、トイレと同じ存在かもしれない。
　だが、俺は大丈夫。この二本の足がある。この足があれば前に進んで行ける。誰かのエッセーの一説の改良版だ。
　Ａは、タオル掛けにタオルを吊るすと、よし、と誰に聞かせる訳でなく、家に向かって走り出した。

「シュー。シュー。シュー」
　スプレー缶から酸素が放出され、Ｂの体全身隅々までいきわたる。目を瞑ったまま、Ｂは実感する。温泉に入って体が温まるように、体の中が殺菌され、清潔になっていくような気がした。
　ようやく落ち着いたＢは、目を開いた。その先には、この公衆トイレが三月末をもって、取り壊されるという張り紙が貼っている。
「三月末か。今は、二月末。もう一か月しかないんだ」
　Ｂにとっては、このトイレは赤の他人だ。トイレを赤の他人と譬えるのは少し変だけど、事実は事実だ。だが、こうして、このトイレが取り壊される運命にあると思うと、赤の他人が実は、青の親戚で、いや、黒のおじいちゃんやおばあちゃん、黄色のお父さんやお母さん、緑色の弟や妹など家族同様に思えてくる。
　別れは定めなのか。定めならば受け入れなければならないけれど、それならば、少しでも受け入れ方を変えようと思った。多分、自分以外の人もそう感じているだろう。
　前よりも一層磨かれたトイレ。眼の前には、造花が飾っているし、トイレットペーパーの先はホテルのように、三角形に折られている。外側は、風船でデコレーションされ、トイレに対する感謝の言葉が綴られている。タオルも備え付けられ、周辺にはゴミひとつ落ちていない。
　じゃあ、あたしにできること。あたしが今、持っているのは酸素スプレー缶。こんなものは必要だろうか。スプレー缶が必要なのはあたしだけ。でも、ひょっとしたら、あたしのように、この世界に落ちつぶされ、息ができない人もいるかもしれない。あたしが、あたしを特別だと思うのは勝手だけど、あたしが必要としているこのトイレは、あたし以外の誰かも必要としている

のだ。
　Ｂは決めた。ハンドバッグに中の、一番底にしまっている、予備の缶を取り出した。まだ、封は切られていない。缶に直接、マジックで記載する。
「どうぞ、御自由にお使いください」
　缶をトイレの中の棚に置いた。少し丸みを帯びた字だ。達筆でない方が親近感を感じるだろう。
Ｂは、もう一度、スプレー缶から酸素を吸収すると、トイレから出ていった。酸素が満ち足りた真っ赤な顔をして。過剰酸素で、火を近づければ爆発しそうな顔だった。

　最終電車が出発した。Ｃはそれを見送った。Ｃは、酔っているものの、醒めつつ酔い、酔いつつ醒めている状態で、意識はしっかりしている。今日はわざと最終電車を遅れたのだ。
　いつものように、コンビニでスポーツ新聞と三百五十ｃｃの缶ビールを一本、五百ｃｃのペットボトルのお茶を一本買い、外に置かれた段ボール箱を一つ掴むと、公衆トイレに向かった。
　電車の最終便が出発したにも関わらず、駅の周辺には、まだ人がいた。タクシーに乗り込む者、ベンチに座って朝が来るのを待つ者、もう一度、飲み直そうと繁華街に向かう者、様々だ。今までは、酒に酔って最終電車に乗り遅れたため、トイレに泊まっていたが、今日は違う。これまで、無料宿泊所として使用してきた公衆トイレにお別れを告げるためだ。
　トイレは閉まっていた。扉に赤いマークが出ている。誰かが使っている。まさか、俺と同じように、このトイレで一晩過ごすつもりなのか。
「おえー。おえー」ゲロを吐く声がする。酔っ払いか。まあ、俺も同じようなものだ。
　しばらくすると、若い男がトイレから出てきた。眼がうつろで、鼻汁をだし、口からは涎を出し、顔色はそう白だ。足はふらつきながら、ベンチの方へ向かって、そのまま座り込むと、首がガクンと右に折れた。
「おい、大丈夫か」仲間らしき若い男が何人か寄って来て、つぶれた若者の腕を肩に掛けて、どこかに消えていっていった。
　トイレの中を見る。ゲロだらけである。もう少し、発射の確立を定めて欲しい。これじゃあ、機関銃じゃないか。あたり一面のゲロだらけだが、不思議と、男は嫌な気にはならなかった。備え付けのトイレットペーパーで、ゲロを拭きとると、便器の中に入れた。手が汚れたので、手を洗おうとトイレの外に出た、手洗い場には、タオルが備え付けられてある。まだ、新品だ。ブランドのマークが赤い。誰が架けたのだろう。役所じゃない。このトイレの愛好家か。気持ちだけいただいて、男はポケットから自分のハンカチを取り出し、手を拭った。
　きれいに掃除されたトイレだが、まだ、消化された食べ物、これは焼き鳥か、いやラーメン、そうビールが胃の中で、ミキサーされ、胃液とミックスされた臭いが漂っている。
「おっ、いいものがある」
　Ｃは、棚の上の缶を取った。芳香剤か。サービスがいい。これも新品だ。封が切られていない。包装しているビニール袋を破り、缶のボタンを押した、シュー。シュー。ハエや力を撃退するのではない。敵は臭いだ。だが、いつまでたっても、臭いは別の臭いに変わらない。だけど、頭

がすっきりはしてくる。男は缶を見た。薄暗いトイレの中なので、良く見えなかったが、目を凝らして見ると、芳香剤じゃなくて、酸素缶だった。
「へえ、こんな缶を使っている奴が、この街にいるんだ」
　新春の駅伝大会等で、倒れこんでいる選手の口元に、スプレー缶を咥えさせているのをテレビで見たことがあるけれど、自分が使うとは思ってもみなかった。このトイレ、ランナーが使用しているのかな。でも、わざわざ、トイレの中で、酸素スプレーを使うのかな。まさか、公衆トイレから公衆トイレまで、駅伝しているんじゃないだろうな、それは面白いけれど、一体、どんな奴だろう。
　Ｃは、酸素スプレーのおかげで、酔いが冷めつつも、醒めたぶんだけ、妄想が強くなった。そのおかげで、少々の胃液と食べ物の混合気体の臭いについても、気にならなくなった。
　Ｃは、いつものように、段ボール紙を便器の上に置くと、体育座りをして、体の上に新聞紙布団をはおった。誰に言うこともなく、いや、トイレに向かって、乾杯と叫んだ。

　朝が来た。いつものようにトイレの掃除にやってきた松川。
「あと、一か月か」
　信号が変わった。横断歩道を渡る。顔を見上げる。風船が見える。赤い風船。黄色の風船。青色の風船。緑色の風船。パントマイムでもいるのかな。いや、今日は平日だ。大道芸人はいないはずだ。いても、こんな早い時間帯では、観客は誰もおらず、おひねりもないため、商売にならないはずだ。それに、あの風船が上がっているのは、公衆トイレの辺りだ。
　松川は歩みを進める。目の前のバスが発車した。隠れていたトイレが見えた。トイレの周りに風船が吊られている。トイレが風船で飾られている。それもひとつふたつじゃない。数十個の風船だ。
　先週の金曜日に掃除をした後、土・日曜日は休みだった。まさかこんなに変わるとは。しかも、風船には、「これまで、ありがとう」や「トイレさん、なくならないで」など、様々なメッセージが、大人だけでなく、子どもの字でも書かれている。中には、「トイレ掃除、いつも御苦労さん」と書かれている。自分のことだ。風船だけでない。トイレのドアを始め、外壁は、様々な花で飾られている。トイレの周囲は、いつも空き缶などが落ちているのに、今日はきれいだ。じゃあ、中は？
　ゆっくりとドアを開ける。ピカピカに磨かれた便器。これは私がしたんじゃない。二日立てば汚れているはずだ。誰かがしたんだ。芳香剤が置かれている。いや、よく見ると酸素缶だ。壁の一面にも造花が飾られている。もう、何もすることはない。でも、これがあたしの仕事だ。
　松川は、倉庫からバケツやぞうきんを取り出すと、これまで以上に、丁寧に掃除を始めた。

十五　長いお別れ

　トイレは思う。俺は、今まで、何年、ここにいたのだろう。人間のように、赤ちゃんで生まれて、成人して、老人になっていく人生を過ごすのではない。いきなり、成人となって、トイレとしての役割を担い、排水管が詰まったり、電球が切れたり、ドアが開かなくなったり、水漏れが起きたり、外壁にひびが入ったりするものの、その都度、修理・修繕がなされ、トイレとしての機能は維持されてきた。年を取るという感覚はない。
　二十四時間、三百六十五日、そして、何十年間、ここに存在してきた。つまり、あるがままだ。そして、ある日、もう必要がなくなったという張り紙が貼られると、壊されてしまう。つまり、存在しなくなる。つまり、死だ。なんだか、あっけないような、あっけがあったような、人生、いや、トイレ生だった。
　これまで、様々な人間の愚痴を聞いたり、ゲロを吐かれたりするなど、全てを受け入れてきた。今、思い返すと、この生き方はよかったような気がする。別に、取り壊されるからといって、感傷的になっているわけでない。あっ、ユンボのつめが俺の体を掴んだ。
「バキバキバキバキ」
　幾星霜を経て、古びることはあっても、壊れることは決してなかったコンクリートの塊が、粉々に崩れ落ちる。
「公衆トイレの取り壊し、はんたーい。もっと、市民の声を聞け。あたしたちの居場所はどこにあるんだ」
　シュプレヒコールの波がうねる。これまでの自分を愛用してくれた人々の声だ。ひどい使われ方もしてきたが、今となっては、思い出がある分だけ、よかったのかもしれない。
　体に飾れられていた風船たちが、糸が切れ、空に向かって飛んで行く。外壁の造花は、無残にも、周囲に飛び散る。これまで、顔を合わしたことのなかった人々が、スクラムを組んで、俺の周りを取り囲んでいる。掃除道具の箒を振り回している中年女。風船を手にしたままジャンプしている女。座薬を掴んだ右手の拳を突き上げている男。トイレットペーパーを体中に巻いている女。タバコをくゆらせている男。口に花を咥え、ダンスを踊っている女。短パンにランニングシャツのランナー。酸素缶を周囲に振り撒いている女。段ボール箱を楯代わりにして行進しているサラリーマン。
　みんな、名前は知らないけれど、顔は知っている。深く、長い付き合いだったからだ。その内側には、機動隊員と役所の人間がいる。取り壊しの業者は、黙々と、自分の仕事をこなしている。そう、みんあ、自分の仕事をしているのだ。

「グシャ」大きな音がした。トイレの天井部分がはぎとられ、ダンプカーの荷台に運ばれた。
「ああああああ」周囲から悲鳴のような、あきらめのような声が出た。だが、トイレに痛みはない。人間が作ってくれたトイレだが、幸運にも、痛みを感じる神経までは配線されていなかったからだ。これも、人間のささやかな思いやりなのか。
　便器が太陽の光の下にさらされた。これまで、電球の明かりしか知らなかったので、眩しい。

じっと陽射しが当たっていると、暖かい。また、天井がなくなると、開放的だ。風が吹く。気持ちいい。たまに、ドアが開けっぱなしになって、風が吹き込んできたことはあったが、全方位から吹く風と戯れるのはいいもんだ。取り壊しと同時に、水が撒かれているので、ほこりは舞わず、咳き込むことはない。
「ああ、いい天気だ。本当に、いい天気だ」
　公衆トイレの意識は薄れた。

「わっしょい」
「わっしょい」
　元気な掛け声の下、トイレが宙に舞う。そう、トイレは神輿のように担がれ、駅の周辺を練り歩いている。トイレが神様になったのだ。
　トイレは見た。駅の二階につながるエスカレータ、その隣にはデパート。駅ビルの中の銀行、自転車が乱雑に置かれた歩道、女子高校生がだべりながらショートケーキを頬張る喫茶、部活帰りの男子高校生が小腹を満たすため、たむろしているコロッケ屋。コンビニもドラッグストアもカラオケ屋もある。何故だか、仏壇屋もある。再び、駅ビルが見えた。神輿がぐるり一周したのだ。
　自分の周りにはこんなにたくさんの店があったのか。トイレは、今さらながら驚く。地域に根ざして数十年。強固な基礎で地面にへばりついていたため、自分から出歩くことができなかった。お客さん（トイレの使用者）がつぶやきから、ある程度の情報は仕入れていたものの、実際に目の辺りにすると、全く異なる。ここは、一大ワンダーランドなのだ。そして、自分も、その一部だった。
　トイレの担ぎ手は、掃除おばさんに、風船姉ちゃん、ダンスお姉さん、ジャージのランナー、段ボールを被った箱男などだ。その周りを、通勤客や学生などが取り囲み、その周りを役所の職員や警察官、取り壊し業者などが取り囲んでいる。みんなが声を合わせ、
「わっしょい」
「わっしょい」
と、トイレを持ち上げる。その度ごとに、トイレは空にわずかだが近づく。こんなことは初めてだ。これまで、トイレは、がっちりと基礎は固められ、何十年も駅前で地に足（足はないが）を付けてきた。それが、取り壊しの運命とともに、これまで、経験することのなかった移動ができるなんて。生きて来てよかった。最後の、最後に、胴上げまで、神様の扱いしてくれるなんて。だが、気をつけなければならない。人間世界では、持ち上げるだけ持ち上げて、後から、手が離され、奈落の底に落とされることはよくある。トイレ使用者からよく愚痴を聞いたものだ。その時だ。
「うああ、水だ」
　トイレを担いでいる人の頭に、肩に、胸に、水が飛び散る。トイレから水が溢れたのだ。老朽化していたので、屋根や壁の隙間から雨水がしみ込んでいただろう。ひょっとしたら、水道管や排水管の亀裂から水や汚水が漏れていたのかもしれない。

「かんべんして。この服、昨日洗ったばかりなのに」
　神輿を担いでいた掃除おばさんが、手を離す。
「いやん」
　風船姉ちゃんも、手に持った風船もろとも担ぎ棒も肩から外す。
「段ボールがべちゃべちゃだ」
　サラリーマンも列から外れる。
「ドスン」
　大きく傾き、地面に落ちた神輿のトイレ。
「ガラガラガラ」
　構造物が、夢が崩れて行く。
　やっぱりそうか。トイレの予想未来図は、現実になった。ただし、ジャージのランナーだけが、
「みんな、どうしたんだ？誰かが水を掛けてくれたんだろ。汗を掻いた後のシャワーは気持ちいいぞ」
と、斜めに傾いたトイレから離れることなく立ち尽くしていた。

「冷たい」
　トイレは夢から覚めた。頭に水を掛けられたからだ。いや、もうトイレではない。トイレの外壁は壊されたものの、どういう訳か、基礎だけは遺った。おげで、今は、花壇の底床になっている。基礎まで掘り起こしたら、費用がかさむため、多分、再利用したのだろう。その基礎部分に土が乗せられ。周囲にレンガが積まれ、花壇が一丁出来上がったわけだ。花の根元に水が撒かれ、水が土に浸み込み、底床まで、そう元トイレの基礎にまで、到達したのだ。
「さあ。みんな元気かな」
　お掃除おばさんの元気な声が聞こえる。いや、違う。今は、公園管理おばさんだ。おばさんは、水道栓をゆるめると、花に向かって、水を遣っている。今は、夏。花壇には、ひまわりの花が揺れている。あれから、公衆トイレは予定通り、取り壊され、風船も造花も、タオルも酸素缶も一緒になくなった。その後の残地には、ポケットパークが整備され、花壇とベンチができた。このポケットパークの管理が、これまで掃除に専念していたおばさんに任された。お掃除おばさんは、春の到来とともに、公園おばさんに衣替えした。
　公園おばさんの仕事は、花壇への水やりなど花の管理と周辺の掃除だ。以前と同じように、掃除を終えた後、ベンチに座って、花を眺め、憩いの時間を過ごすのだろう。
「さあ、終わったよ」
　おばさんは花に話し掛けると、拾ったゴミを持って、公園から立ち去った。背が高く伸びたひまわりの花が、風に吹かれておじぎした。

　おばさんが立ち去った後、若い女性がやってきて、ベンチに座ると、風船を膨らまし始めた。その横では、お尻をベンチに押し続けている男がいて、花壇の周りでは女がダンスを踊り、花に

向かってタバコの煙を吹きかけている男や、トイレットペーパーの代わりにティッシュで洟を拭いている女、股関節やアキレス腱を伸ばしているジャージ姿の中年ランナー、酸素を辺りに撒き散らしている女、そして、段ボールをベッド代わりに昼寝しているサラリーマンがいた。

十六　エピローグ

「ふう。やっと終わった」

　作者は今、トイレの中。便座に座りながら、膝の上にパソコンを置いている。これまで、ただ単にトイレでは用を足すことしかしてこなかった。普通の人はそうだろう。だが、よくよく考えてみると、休憩であり、安堵の時間を、ただ単に、排泄のみに使用するのはもったいない。皆さんにも、よくあることだろう。例えば、散歩をしていたり、スーパーで買い物をしていたり、風呂の中で鼻歌を歌っていたり、洗濯物を干していたりしていた時に、突然、仕事で悩んでいたことの解決方法や人を笑わせるネタなどを思いつくことがあるはずだ。

　作者の場合は、たまたま、その場所がトイレなのである。だが、折角思い付いたアイデアも、用を足し、水洗のレバーを回し、手を洗っている最中に、排泄物と一緒に流れてしまうことがよくある。そして、よくあるように、一度、忘れたことは思い出せない。ただし、忘れたということを覚えている。このもどかしさは、譬えようがないほど、もどかしい。つまり、もどかしいのである。

　だが、素晴らしいアイデアを忘れるなんて、国家的損失があっていいものか。それはよくない。日本は資源最小国だ。個人が持つ才能、思い付いたアイデアと言う資源を最大限に生かす必要がある。

　それ以来、作者は、トイレの中にパソコンを持ち込み、妄想を書きとめ、いや、打っている。わざわざ、パソコンじゃなくて、紙のノートでもいいのではないかという突っ込みもあるが、作者は字が汚く、自分で書いた字さえも、読めなくなることがある。こんな、悲劇的な、いや、喜劇的なことがあるものか。

　それなら、携帯電話を活用して、思い付くことを打ち込めばいいじゃないかと言うだろう。その通りだ。どうだ、素直だろう。

　あなたの御指摘を作者は、甘んじたり、苦み走ったり、少し辛口であったり、塩けが足りないなどと、言うつもりはない。作者は、ただ単に、携帯の片手打ちが苦手なのである。そんなことでいのか。苦手だから、逃げるなんて、卑怯だ、進歩がない、もっと積極的にという罵声も聞えてくる。それはその通りだ。どうだ、素直だろう。

　その言葉を甘んじたり、いや、二度、同じセリフを続けるのは、しつこいからやめよう。だが、物語を語る人なんて、偏執狂じゃないとできない。取り合えず、自分を弁護しておく。

　兎に角、トイレにパソコンを持ち込むのは、作者のライフスタイルなのだから、読者の皆さんは、見逃して欲しい。例えは悪いかもしれないが、朝、起きた時に、顔を洗い、歯を磨き、うがいをするのと同じだ。先に申し上げましたように、例えが悪く、全く、何の例えにもなっていない。

　このことから離れるために、話を元に戻す。

　何の話だっけ？そうだ、時間の有効活用だ。今日が人生最後の日だと思って生きている人は何人いるだろう。何の保証、保障、補償もないまま、あしたが来ると思っているのか。それこそ、クルクルジャンケン、グー、チョキ、パーだ。

作者も、今、書いている（正確には、キーボードを叩いている）物語の続きをあしたも書くつもりである。こんな中途半端なままじゃ、本の発売さえもならない。
　この作品が、未完の大作か、中作か、小作か、は、後世の人が決めるのだろうが、現在、思い付きで、さわりの部分だけ書いている作品は、二十から三十はある。このまま日の目をみず、データー書庫のなかのまま、パソコンと一緒に処分され、消えてしまうおそれがありながらも、それもまた一興であると思いながら、やはり少しは外の空気を吸って欲しいと願うのが、作者としての親心である。
　そう、作品は、自分の子どもであり、自分の排出物でもある。恥ずかしい気持ちもあり、自慢したい気持ちもある。この気持ちから、この作品を書こうと思い至ったわけではない。結果的に、トイレの話になったわけである。臭いものに蓋をするように、この作品が人々の目に触れないのは、寂しい気持ちであり、かつ、排出物のように、そのまま健康状態を確認することなく、全く状況・状態を見ずに、水に流したいと思う気持ちもある。
　この相反する気持ちが浄化された時に、人々が驚嘆する作品が生まれるのであろう。残念ながら、この長ったらしい題名の作品が、その余りある名誉や栄誉を受けることはないだろうが、少なくとも、読者の皆さんには、作者の意図が伝わったと思う。
　この物語の言いたいことは、
「公衆トイレよ。空を飛んで、顔を真っ赤にして立ち尽くしているあの娘の元へ飛んで行け！」
である。
　繰り返し言う。
「公衆トイレよ。空を飛んで、顔を真っ赤にして立ち尽くしているあの娘の元へ飛んで行け！」
だ。
　構想二十年。ほぼ毎日、わずか五分の間、トイレで書き続けたこの作品が、読者の皆さんの心に、刻み込まれることなく、水洗トイレのように、爽やかに流れることを期待している。
　賢明なる読者の皆さん。本当に、最後まで、作者のたわごとにつきあっていただき、お礼を申し上げたい。また、お会いできることを、本当に楽しみにしています。

「バタン」
　トイレのドアが閉まった。男はパソコンを大事そうに両手で抱え、自分の部屋に戻っていった。トイレは、便座が男に温もりを奪われたにも関わらず、温かい気持ちで彼を見送った。